

秘

1832

海軍公報

第四七七三號

昭和十九年八月十八日(金)

海軍大臣官房

○令 達

内令第九三六號之二

第七十五號驅潛特務艇
第七十六號驅潛特務艇

右本籍ヲ吳鎮守府卜定ム

昭和十九年八月九日

海軍大臣

内令 撰
要登載

内令第九三六號之三

昭和十八年内令第一八三三號別表中左ノ通改正ス

昭和十九年八月九日

海軍大臣

内令 撰
要登載

佐伯防備隊ノ項驅潛特務艇ノ欄「第七十四號(吳)」ノ次ニ
「第七十五號(吳)、第七十六號(吳)」ヲ加フ

(内令提要卷三、四八ノ二頁参照)

内令第九五二號

昭和十一年内令第四五號中左ノ通改正ス

昭和十九年八月十四日

海軍大臣

内令 撰
要登載

第一項(二)呼稱番號區分中

大村海軍航空隊

オ

大村海軍航空隊

オ

諺間海軍航空隊

タ

諺間海軍航空隊

タ

高雄海軍航空隊

タ

高雄海軍航空隊

タ

岡崎海軍航空隊

オ

岡崎海軍航空隊

オ

岩國海軍航空隊ノ項ヲ削ル

ヲ

岩國海軍航空隊

ヲ

附 則

本令ハ昭和十九年八月十五日ヨリ之ヲ施行ス

参照 昭和十一年内令第四五號ハ航空機番號附與法及其ノ表示方ノ
件ナリ(内令提要卷三、二二六ノ四頁)

内令第九五三號

第十二號魚雷

内令 撰
要登載

秘海軍公報 第四七七三號 昭和十九年八月十八日

一一一五

右本籍ヲ横須賀鎮守府卜定ム

昭和十九年八月十四日

海軍大臣

内令第九五四號

昭和十五年内令第六四六號特設海軍工作部等ノ所掌區分等ヲ定ムルノ件申左ノ通改正ス

昭和十九年八月十四日

海軍大臣

南西方面海軍航空廠セブ分工場ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

南西方面海軍航空廠
ザンボアンガ分工場

ザンボアンガ
所在地方面各部ノ航空兵器ノ造修、保管及供給ニ關スル事項

(内令提要卷一、三八ノ五四ノ三頁參照)

内令第九五五號

海軍航空隊ノ所管、名稱及所在地又ハ原駐基地ノ件中左ノ通改正セラル

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

横須賀鎮守府ノ部中岡崎海軍航空隊ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

第二岡崎海軍航空隊 愛知縣碧海郡

吳鎮守府ノ部中岩國海軍航空隊ノ項ヲ削ル

佐世保鎮守府ノ部中出水海軍航空隊ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

第二出水海軍航空隊 鹿兒島縣出水郡

同部中高雄海軍航空隊ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

第二高雄海軍航空隊 臺灣高雄州岡山郡

同部中佐世保海軍航空隊ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

國分海軍航空隊 鹿兒島縣始良郡

同部中鎮海海軍航空隊ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

元山海軍航空隊 朝鮮咸鏡南道德源郡

舞鶴鎮守府ノ部中大津海軍航空隊ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

滋賀海軍航空隊 滋賀縣滋賀郡

左ノ地ニ海軍航空隊分遣隊ヲ置ク部中

三重海軍航空隊西ノ宮分遣隊 兵庫縣西ノ宮市

滋賀海軍航空隊西ノ宮分遣隊 兵庫縣西ノ宮市

滋賀海軍航空隊寶塚分遣隊 兵庫縣武庫郡

〔註開海軍航空隊天草分遣隊〕ヲ〔博多海軍航空隊天草分遣隊〕ニ改ム

同部中三重海軍航空隊奈良分遣隊ノ項ノ次ニ左ノ如ク加ヘ三重

海軍航空隊滋賀分遣隊、人吉海軍航空隊出水分遣隊、大村海軍

航空隊元山分遣隊及出水海軍航空隊國分分遣隊ノ各項ヲ削ル

三重海軍航空隊高野山分遣隊 和歌山縣伊都郡

(内令提要卷一、三〇ノ三、九頁参照)

内令第九五六號

海軍練習航空隊ニ指定ノ件中左ノ通改正セラレ

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

内令
登載

「岡崎海軍航空隊」ノ次ニ「第二岡崎海軍航空隊」ヲ、「天津海軍航空隊」ノ次ニ「滋賀海軍航空隊」ヲ、「出水海軍航空隊」ノ次ニ「第二出水海軍航空隊」ヲ、「鹿児島海軍航空隊」ノ次ニ「國分海軍航空隊」ヲ、「申良海軍航空隊」ノ次ニ「元山海軍航空隊」ヲ、「高雄海軍航空隊」ノ次ニ「第二高雄海軍航空隊」ヲ加ヘ「岩國海軍航空隊」ヲ削ル

(内令提要卷一、三〇ノ四二ノ一頁参照)

内令第九五七號

昭和十八年内令第二〇五五號海軍練習航空隊ノ所掌事項ノ件中左ノ通改正ス

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

内令
登載

「出水海軍航空隊」ノ下ニ「國分海軍航空隊、元山海軍航空隊、高雄海軍航空隊」ヲ、「入吉海軍航空隊」ノ下ニ「第二出水海

軍航空隊」ヲ、「岡崎海軍航空隊」ノ下ニ「第二岡崎海軍航空隊」ヲ、「美保海軍航空隊」ノ下ニ「滋賀海軍航空隊」ヲ加ヘ岩國海軍航空隊ノ部ヲ削ル

「高雄海軍航空隊

陸上機及艦上機ノ操縦ヲ専修スル飛行術練習生ノ教育

「第二高雄海軍航空隊」ニ改ム

(内令提要卷一、三〇ノ四三頁参照)

内令第九五八號 (軍極秘公報(乙配付)ニ掲載)

内令第九五九號

驅逐隊編制中左ノ通改定セラレ

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

内令
登載

第一驅逐隊ノ項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

第二驅逐隊 早霜、秋霜、清霜

(内令提要卷一、六八頁参照)

内令第九六〇號

潜水隊編制中左ノ通改定セラレ

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

内令
登載

秘海軍公報 第四七七三號 昭和十九年八月十八日

一一七

第三十三潛水隊ノ項中「呂號第四十九、」ヲ削ル
第五十一潛水隊ノ項ヲ削ル

(内令提要卷一、七〇頁参照)

内令第九六一號

吳鎮守府豫備潛水艦

呂號第一百十二潛水艦

佐世保鎮守府豫備潛水艦

呂號第一百九潛水艦

右練習兼警備潛水艦ト定メラル

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

○通牒

經給第一四八號

昭和十九年八月十五日

海軍省經理局長

關係各廳長殿

海軍武官又ハ文官ニシテ軍需省ノ文官ニ專

任、專補又ハ兼任、兼補セラレタル者ノ給

與ニ關スル件通牒

首題ニ關スル件左記ニ依ル義トシテ知相成度

記

一 軍需省ノ文官(軍需省軍需官、軍需監理官、軍需技師、軍需理事官、軍需官補、軍需監理官補、軍需技師以下之ニ同ジ)ニ專任又ハ專補セラレタル者ノ給與ハ軍需省(軍需監理部ヲ含ム以下之ニ同ジ)ニ於テ之ヲ支給ス
前項ニ該當スル者ノ御用掛手當ハ海軍ニ於テ支給ス

二 軍需省ノ文官ニ兼任又ハ兼補セラレ主トシテ海軍各廳ニ於テ勤務スル者ノ給與ハ海軍ニ於テ之ヲ支給ス

三 軍需省ノ文官ニ兼任又ハ兼補セラレ主トシテ軍需省ニ服務スル者ノ給與ハ左ニ依ル

(イ) 海軍ニ於テ支給スルモノ

本俸

戰時増俸

臨時家族手當

(ロ) 軍需省ニ於テ支給スルモノ

(一) 戰時食料(徹夜、宿直助料)

(二) 賞與

四 赴任旅費

軍需省ノ文官ニ專任、專補又ハ兼任、兼補セラレタル者ニシテ海軍ヨリ軍需省へ轉屬ノ爲ノ赴任旅費(家族移轉料ヲ含ム以下之ニ同ジ)ハ海軍(出發廳)ニ於テ之ヲ支給ス

前項ニ該當スル者海軍ニ復歸セシメラレタル場合ノ赴任旅費ハ軍需省(出發廳)ニ於テ支給ス但シ派遣手當及職地ニ赴任スル者ノ赴任旅費ハ海軍ニ於テ支給ス

<p>五 出張旅費</p>	<p>軍需省ノ用務ヲ以テ出張スル者ノ旅費ハ軍需省ニ於テ之ヲ支給ス</p>																									
<p>六 海軍ニ於ケル給與掌理ハ左ノ區分ニ依ル</p>	<p>第一號第二項ニ該當スルモノハ海軍省經理局 第二號及第三號ニ該當スルモノハ勤務廳 第四號但書ニ該當スルモノハ軍需省ヨリ赴任ノ者ハ海軍省經理局、軍需監理部ヨリ赴任ノ者ハ同一地ニ在ル造船造兵監督會計官</p>																									
<p>七 適用期日</p>	<p>昭和十九年八月一日以後ノ給與ニ付之ヲ適用ス</p>																									
<p>○ 雜 款</p>	<p>○感狀授與通知 昭和十七年十月二十六日及昭和十七年十一月十二日驅逐艦天津風勤務者ニ對シ左記ノ通歴歴ニ記註相成度</p>																									
<table border="1"> <thead> <tr> <th>年月日</th> <th>記</th> <th>事</th> <th>備</th> <th>考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>一八九一五</td> <td>ソノモン</td> <td>方面作戰ニ參加シ部</td> <td>昭和十七年十月二十</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>陸感狀ヲ授與セラル</td> <td>(聯合艦隊)</td> <td>六日參加シタルモノ</td> <td></td> </tr> <tr> <td>一八九一五</td> <td>ルンガ</td> <td>沖作戦ニ參加シ部隊感</td> <td>昭和十七年十一月十</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>狀ヲ授與セラル</td> <td>(聯合艦隊)</td> <td>二日參加シタルモノ</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	年月日	記	事	備	考	一八九一五	ソノモン	方面作戰ニ參加シ部	昭和十七年十月二十			陸感狀ヲ授與セラル	(聯合艦隊)	六日參加シタルモノ		一八九一五	ルンガ	沖作戦ニ參加シ部隊感	昭和十七年十一月十			狀ヲ授與セラル	(聯合艦隊)	二日參加シタルモノ		<p>(天津 風 驅 逐 艦 長)</p>
年月日	記	事	備	考																						
一八九一五	ソノモン	方面作戰ニ參加シ部	昭和十七年十月二十																							
	陸感狀ヲ授與セラル	(聯合艦隊)	六日參加シタルモノ																							
一八九一五	ルンガ	沖作戦ニ參加シ部隊感	昭和十七年十一月十																							
	狀ヲ授與セラル	(聯合艦隊)	二日參加シタルモノ																							
<p>○開除</p>	<p>第三五二海軍航空隊ハ八月一日長崎縣大村市大村航空基地内ニ開隊セリ</p>																									
<p>○改稱</p>	<p>舊名稱 高雄海軍軍需部基隆供給所 (日新町六番地ノ七) (基隆港務部内) 新名稱 右 同基隆出張所 (右) 同 (高雄海軍軍需部)</p>																									
<p>○事務所移轉</p>	<p>海軍電波本部ハ八月十二日東京都芝區田村町一丁目二番地日産館 (艦政本部建物) 五階ニ移轉セリ</p>																									
<p>○事務開始</p>	<p>第四十二號海防艦艇裝員事務所ヲ八月三日長崎縣長崎市飽ノ浦長崎監督官事務所内ニ設置シ事務ヲ開始セリ 第四十四號海防艦艇裝員事務所ヲ八月三日長崎縣長崎市飽ノ浦長崎監督官事務所内ニ設置シ事務ヲ開始セリ</p>																									
<p>對潜訓練隊ハ八月五日吳防備戰隊司令部内ニ於テ事務ヲ開始セリ</p>	<p>第三百三十七號特設輸送艦艇裝員事務所ヲ八月十日佐世保海軍工廠内ニ設置シ事務ヲ開始セリ</p>																									
<p>第三十五號海防艦艇裝員事務所ヲ八月十二日神奈川縣橫濱市鶴</p>																										

秘海軍公報 第四七七三號 昭和十九年八月十八日

秘海軍公報 第四七七三號 昭和十九年八月十八日

見區辨天町一七日本鋼管株式會社鶴見造船所内ニ設置シ事務ヲ開始セリ

○事務所撤去

第二十九號海防艦艦裝員事務所ハ八月八日之ヲ撤去セリ

槇嶺裝員事務所ハ八月十日之ヲ撤去セリ

○勤務者赴任先

第三聯合通信隊司令部ヘノ轉勤者ハマニラ(第三十一通信隊)

ニ赴任セシメラレ度

(第三聯合通信隊)

○正誤

八月九日秘海軍公報一〇六九頁下段官房人機密第一五八八號中「通信衛甲種又ハ乙種專修」ハ「通信衛甲種又ハ乙種」ノ、八月十四日秘海軍公報第四七六九號一一〇二頁下段雜款欄旅費支給ニ關スル件中(艦船警戒部)ハ(船舶警戒部)ノ孰モ誤

合同海軍葬儀執行

期日及時刻	大東亞戰爭戰歿者	喪葬管理者	場所	記事
九月六日一三〇〇	故海軍少佐小林直一外諸勇士	長野地方海軍人事部長	長野市藏春閣	佛式
九月二十一日同	故海軍軍醫中佐稻葉玉六外諸勇士	宇都宮地方海軍人事部長	宇都宮市縣教育會館	同

○本日軍極秘海軍公報第八號(乙配付)發行セリ

○本日普通公報發行セズ

秘

1838

海軍公報 第四七七四號

昭和十九年八月十九日(土)
海軍大臣官房

○令 達

内令第九六二號
昭和十九年内令第四三九號別表中左ノ通改正ス
昭和十九年八月十五日

内令提
要登載

海軍大臣

第二魚雷艇隊ノ項中「²⁸」ノ下ニ
〔吳〕50
〔吳〕73
〔吳〕212
〔吳〕213
〔吳〕214
ヲ加フ

第二十五魚雷艇隊ノ項中「407」ノ下ニ「470
471
473」ヲ加ヘ同項ノ次
ニ左ノ一項ヲ加フ

第二十七
魚雷艇隊
鎮守府
佐世保
417
419
426
427
430
441
443
446
448
499
500
805
806
809
810
811
812
813
814
820
821
822
823

第三十一魚雷艇隊ノ項中ニ

舞鶴鎮守府
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
519
520
521
522
523
524
525
526
529
530
531
ヲ加

(内令提要卷三、四八ノ二七頁参照)

内令第九六三號

第二百十五號驅潛特務艦
内令提
要登載

秘海軍公報 第四七七四號 昭和十九年八月十九日

右本籍ヲ吳鎮守府卜定ム

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

内令第九六四號

昭和十八年内令第一八三三號別表中左ノ通改正ス

昭和十九年八月十五日

内令提
要登載

海軍大臣

佐伯防備隊ノ項驅潛特務艦ノ欄「第九十九號(吳)」ノ次ニ
「第二百十五號(吳)」ヲ加フ

(内令提要卷三、四八ノ二二頁参照)

内令第九六五號

潛水隊編制中左ノ通改定セラル

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

内令提
要登載

第三十三潛水隊ノ項中「呂號第六十九」ヲ削ル

(内令提要卷一、七〇頁参照)

内令第九六六號

舞鶴鎮守府練習兼警備潛水艦

一一二

呂號第六十八潛水艦

右警備潛水艦ト定メラル

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

内令第九六七號

伊號第三百六十七潛水艦

右本籍ヲ佐世保鎮守府ト定メラル

第七號輸送艦

右本籍ヲ横須賀鎮守府ト定メラル

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

内令第九六八號

特設通信隊及同分遣隊所在地、種別等ノ件中左ノ通改正セラル

昭和十九年八月十五日

海軍大臣

佐世保鎮守府ノ部中第八十五通信隊ノ項ヲ削ル

(内令提要卷一、六四ノ一頁参照)

○通牒

官房備機密第三一八號ノ八

昭和十九年八月十八日

海軍省副官

各廳長殿

郵便物ニ關スル件通牒

昭和十九年官房備機密第三一八號通牒首題ノ件別冊郵便物ニ關スル例規中左記ノ通改メラレ候

記

附錄所在地區別符表(其ノ一)中ニ

千	茂
美	幌
ヲ加フ	イ壹參四

附錄部隊區別符表(其ノ二)中ニ

第九五五	航空隊	テ六四
第三十三	特別根據地隊	テ六五
第五	補充部	テ六六
第三十一	港務部	テ六七

同ヲ加フ (其ノ三)中ニ

第一六一	防空隊	イ壹參貳
第一六二	防空隊	イ壹參參
第一三〇	防空隊	イ壹參四
第三百十四	設營隊	イ壹參五

第一六三防空隊	イ壹參六
第一六四防空隊	イ壹參七
第一六五防空隊	イ壹參八

第十七海軍軍用郵便所	父島方面特別根據地隊	橫須賀府	橫須賀府
------------	------------	------	------

第五海軍軍用郵便所	所員	專任	九人	判任	十二人	員
第七海軍軍用郵便所	所員	專任	十一人	判任	十三人	員
第十海軍軍用郵便所	所員	專任	十三人	判任	十五人	員
第十四海軍軍用郵便所	所員	專任	十五人	判任	十七人	員
第二十四海軍軍用郵便所	所員	專任	十七人	判任	十九人	員
第二十五海軍軍用郵便所	所員	專任	十九人	判任	二十一	員
第二十六海軍軍用郵便所	所員	專任	二十一	判任	二十三	員
第二十七海軍軍用郵便所	所員	專任	二十三	判任	二十五	員

ヲ加フ
別表海軍軍用郵便所及同派出所一覽表中「第十一海軍軍用郵便所」「第二十二海軍軍用郵便所」ノ項及備考「五」ヲ削リ「第十七海軍軍用郵便所」ノ項ヲ加ヘ職員ノ欄中所員ヲ左ノ通改正ス

監督官	兼務	一人	奏任
所長	專任	六人	判任
所員	專任	六人	判任
	專任	十人	員

第四十三海軍軍用郵便所 所員 專任 十九人 判任 六人 員

軍務一機密第七〇三號
昭和十九年八月七日

海軍省軍務局長

關係各廳長殿

北九州空襲ノ事例ニ鑑ミ電力防空上特ニ

緊急措置ヲ要スベキ事項ニ關スル件申進

首題ノ件ニ關シ別紙ノ通電力局長ヨリ協力方依頼有之候條可然

取計相成度

(別紙)

一九電局第一三三三號

昭和十九年七月二十四日

秘海軍公報 第四七七四號 昭和十九年八月十九日

電力局長

海軍省軍務局長殿

北九州空襲ノ事例ニ鑑ミ電力防空上特ニ緊急措置ヲ要スベキ事項ニ關スル件

標記ノ件ニ關シ本日別添ノ通各軍需監理部長宛通牒致シ置キタルニ付了知ノ上其ノ圓滑ナル實施方ニ關シ格別ノ協力相煩度

(別紙)

一九電局第一三三三號

昭和十九年七月二十四日

電力局長

各軍需監理部長殿

北九州空襲ノ事例ニ鑑ミ電力防空上特ニ緊急措置ヲ要スベキ事項ニ關スル件

去ル六月十六日未明北九州敵機來襲ニ因ル電力施設ノ被害狀況ハ別紙(一)ノ如クナル處、之ヲ事例ニ鑑ミ各廳關係官ト協議ノ上別紙(二)ヲ電力防空戰訓トシテ決定致シタルニ付右送付ス、就テハ貴管下電氣事業者ニ對シ右趣旨ノ周知徹底方配意相煩度
追而右戰訓第三項ニ關シ敵機來襲下需用者ニ對スル供給ヲ遮斷シタル後ノ再送電ノ時期ヲ空襲警報解除後ト爲ス等ノ點ニ付テ豫メ關係ノ向ト協議ノ上措置セラルルト共ニ遮斷スベキ線路ハ各地區ノ實情ニ應ジ豫メ之ヲ決定シ置キ關係需用者ニ周知セシメ置ク等可然措置セラレ度

別紙(一)

電力關係空襲被害狀況(昭一九・七 一三〇現在)

一 發電所

1 日發戶畑發電所

北側海中ニ爆彈落下、爆風ノタメ海岸側窓硝子破損其他異狀ナシ

二 變電所

1 黒崎變電所

窓硝子破損セル外其他異狀ナシ

三 送電線路

1 六月十六日〇一二五

〇一三七 九配上津役ニ若松線自動遮斷ス

〇三二三 試送電セルモ結果不良

〇三一四 上津役變電所ヨリ甲線試送電不良

ニ付本送電ス

若松方面〇一二五〇三一四迄一時間四九分停電

三六號柱 二、五二號柱 一條斷線

原 因

(二島變電所分岐上津役塔及液體燃料社宅上方一〇〇米ノ地點)

甲線復舊完了ス

日明ニ戶畑線二號線接地發生送電停止

2 六月十六日〇一五五

一七二〇

一八〇〇 二七號柱、二八號柱間ニ於テ飛行機ノ金屬片落下ニヨル碍子破損ヲ

四 配電線路

一八一〇 送電開始

發見シ復舊ス

1 門司市内

大里方面、門司市内各所ニ數發爆彈落下

〇六〇〇

2 小倉市内

大門變電所系

田浦方面一部、楠町以南停電全部送電完了
九配小倉支店附近、上富野、金田、三郎丸方面各數發爆彈落下

砂津變電所系

日明線斷線〇八一五復舊送電
到津線斷線一三五〇復舊送電
大阪曹達線斷線〇八一五復舊送電
魚町線斷線一三四五復舊送電

北方線斷線一五〇〇一部ヲ除キ送電

3 戸畑市内

小倉變電所系

富野線斷線一二〇〇復舊送電
全同線斷線一三〇〇復舊送電
天籟寺干防町(明礦社宅)及其ノ附近

戸畑變電所系

一枝(日鐵社宅附近)戸畑中原(國民學校前)及小倉中原ニ數發爆彈落下
東部線一〇四〇戸畑水道線斷線復

4 八幡市内

舊送電
枝光線斷線
西部線一部電柱倒壞 二三五〇全
中原線斷線
部送電
日鐵構内 陳山瓦斯タンク、黒崎變電所前附近其他牧山附近ニ集中攻撃ヲ受ク

5 若松市

八幡變電所
小口動線 一七二五全部送電
一般電燈動線
藤ノ木鐵道線路ニ一ヶ爆彈落下
藤ノ木線ノミ停電〇八一五復舊送電

五 電 鐵(西日本鐵道)

1 宮地嶽線新香椎名島間香椎神宮踏切寄西方三〇〇米ノ地點ニテ電鐵線ト省線上リ線ノ中間ニ爆彈落下(穴徑一五米、深サ五米)道床破壞一二〇米、軌條二〇米彎曲シノ前後一五〇米海岸側ニ押サレ側柱ニテ止ル、側柱倒壞

道床

(イ) 高壓線 一回線五條間斷線 〇六一〇 復舊送電
電話線 四回線五條間斷線 〇四三〇 一部復舊
〇七〇〇 完了
〇六一五 復 舊

秘海軍公報 第四七七四號 昭和十九年八月十九日

一一二五

(ロ) 電車線 ○五〇〇送電、平常通り運轉ス

2 北九州方面

(イ) 八幡市内 陳山||西前田間 軌條並電車線
十二條開破壤
枝光||牧山堂山間 軌條二ヶ所彎曲

(ロ) 小倉市内 魚町||砂津間饋電線二ヶ所切斷
砂津變電所内一號線斷線

(ハ) 黒崎||折尾間 門司||緑町間 電車運轉中
門司||折尾間 十六日一八〇〇 枝光||戸畑間十七日
正午復舊

六 其他自家用關係

1 三菱化成牧山工場(元旭硝子)第一發電所||第二發電所
間ノ給水唧筒室ニ爆彈落下、多少被害アルモノノ如シ、
無機化學工場ニ相當ノ被害アルモ詳細不明ナリ

2 日本製鐵八幡製鐵所構内(旭硝子寄)爆彈六ヶ落下セル
モ工作物ニ被害ナク其他異狀ナシ

別紙(二)

北九州空襲ニヨル電力防空戰訓

第一 警報傳達ニ就テ

警報ノ傳達ニ付一部ニ誤報アリタルニ鑑ミ、防空警報發令時
ニ於ケル警報傳達ハ正規ノ系統ニヨリ授受スルコトトシ且敏
速ナルモノニヨリ措置スルコト

第二 勤務配置ニ就テ

敵機來襲下ニ於テ自宅ヨリ職場へ駆付ルコトハ困難ナルニ
付、第一種警戒警報發令ノ際ノ電氣事業施設宿直人員ヲ應急
措置ニ支障ナキ程度ニ更ニ増加セシムルコト

第三 空襲時ニ於ケル電力供給ニ就テ

二次的被害ヲ防止スル爲敵機來襲下ニ於テハ重要需用者ニ對
スル配電線路ヲ防ギ、一般配電線路ハ變電所ニ於テ供給遮斷
スルヲ得ルコト

單獨配電線ニ依リ供給スル需用者へノ供給遮斷ハ需用者側ニ
於テ遮斷シタル後ニ於テ之ヲ爲スコト

敵襲下ニ於テモ供給繼續スベキ重要需用ハ重要軍事施設、重
要通信施設、重要交通機關、重要上水道施設、重要瓦斯施設
重要排水施設等電ニ依ル二次的被害ノ大ナル工場、鑛山等ト
シ各地區ノ實情ニ應ジ豫メ箇々ノ需要者ヲ決定シ置クコト

第四 火力發電所ノ運用ニ就テ

火力發電所ハ空襲ニ依ル二次的被害ヲ局限スル爲空襲警報下
ニ於テ電力供給上支障ナキ限リ機器ノ運轉臺數ヲ減少スルカ
又ハ運轉停止スルコト

第一種火力發電所ヲ防護スル目的ヲ以テ空襲警報發令時ニハ
並行運轉中第二種又ハ第三種火力發電所ニ負荷ヲ移行スルコ
ト

第五 自家用火力發電所及供給事業用ヨリノ供給電力トノ分擔
ニ就テ

<p>空襲警報下ニ於ケル自家用火カ發電所ノ運轉及之ト電氣供給事業ヨリノ供給電力トノ分擔方法ニ關シ豫メ計畫ヲ樹テ充分ナル連絡ヲナシ置クコト</p>	<p>第六 電線路事故ニ就テ 被害地區ノ配電線斷線等ノ事故ノ發見ヲ迅速化スル爲、之ガ發見者ハ隣組ヲ通ジ直チニ電氣事業者ニ通知スル様周知セシムルコト</p>	<p>第七 燈火管制ニ就テ 燈火管制徹底化ノ急務ナルニ鑑ミ、電氣事業施設ニシテ燈火管制不充分ナルモノハ速カニ其ノ完備ヲ計ルコト</p>	<p>第八 從業員ノ待避施設等ニ就テ 電氣事業設備ニ於ケル從業員ノ待避施設ノ完備ヲ促進スル要アルコト</p>	<p>第九 其ノ他 警備設備復舊要員ノ現場驅付ノ爲通行證トシテ暗夜ニ於テモ判別容易ナル腕章ヲ交付スル要アルコト、又汽車乗車券ノ入手ヲ容易ナラシムル要アルコト</p>	<p>軍務一機密第七五七號 昭和十九年八月十七日</p>	<p>關係各廳長殿 海軍省軍務局長</p>	<p>軍人軍屬竝ニ其ノ家族ノ言動ニ關スル件申進 輓近軍人軍屬竝ニ其ノ家族等ノ不用意ナル言動ニ依リ或ハ軍事機密ニ亙ル事項或ハ敗戦思想ノ因子トナルガ如キ事項ヲ一般ニ流布シタル事例尠カラザルヤニ聞及ビ候處戦局ノ緊迫ニ伴ヒ其ノ一般社會ニ及ボス影響特ニ大ナルモノアルニ鑑ミ軍人軍屬ハ固ヨリ其ノ家族ニ對シテモ一層自肅戒心此ノ種事件ノ絶無ヲ期シ進テ決戦下國民ノ指導者タルノ實ヲ發揮スル如ク指導方可然配慮相成度 尙出征家族又ハ遺家族等ニ對シテモ機會アル毎ニ同様指導セシムル様致度</p>						
<p>機密ニ亙ル事項或ハ敗戦思想ノ因子トナルガ如キ事項ヲ一般ニ流布シタル事例尠カラザルヤニ聞及ビ候處戦局ノ緊迫ニ伴ヒ其ノ一般社會ニ及ボス影響特ニ大ナルモノアルニ鑑ミ軍人軍屬ハ固ヨリ其ノ家族ニ對シテモ一層自肅戒心此ノ種事件ノ絶無ヲ期シ進テ決戦下國民ノ指導者タルノ實ヲ發揮スル如ク指導方可然配慮相成度 尙出征家族又ハ遺家族等ニ對シテモ機會アル毎ニ同様指導セシムル様致度</p>		<p>艦本機密第一一號ノ一二六〇五 艦船造修規則第十四條ニ依ル書類ノ様式別冊中左ノ通改正ス 昭和十九年七月二十六日 海軍艦政本部長</p>	<p>目次第四十一號様式ノ下ニ左ノ如ク加フ</p> <table border="1" data-bbox="646 1153 710 1758"> <tr> <td>第四十一號様式</td> <td>第四十二號様式</td> </tr> <tr> <td>第四十一號様式</td> <td>第四十二號様式</td> </tr> <tr> <td>第四十一號様式</td> <td>第四十二號様式</td> </tr> <tr> <td>第四十一號様式</td> <td>第四十二號様式</td> </tr> </table>	第四十一號様式	第四十二號様式	第四十一號様式	第四十二號様式	第四十一號様式	第四十二號様式	第四十一號様式	第四十二號様式	<p>第四十一號様式ノ次ニ第四十二號様式(一)乃至第四十二號様式(七)ヲ加フ (別紙添)</p>	<p>○表 彰 精密中「グリ」用双物保持器 金貳拾五圓 造機部 機工工手 立石 隆實</p>
第四十一號様式	第四十二號様式												
第四十一號様式	第四十二號様式												
第四十一號様式	第四十二號様式												
第四十一號様式	第四十二號様式												

秘海軍公報 第四七七四號 昭和十九年八月十九日

裁断器及巻取器

金貳拾五圓 造機部 刷版工手 本岡 玉吉

「タービン」推力軸受調整環半割加工用取付具

金參拾圓 造機部 機工職手 上田 國三

右者各肩書ノ考案ヲ爲シ各頭書ノ通廣海軍工廠長ヨリ技術賞與ヲ支給セラレタリ

曲脈軸、推進軸、楔溝及曲脈栓孔明加工装置

金四拾圓 造機部 機工工長 西川 龜市

金參拾圓 同 機工工手 山口 秀次

右者各肩書ノ考案ヲ爲シ各頭書ノ通馬公海軍工作部長ヨリ技術賞與ヲ支給セラレタリ

強丸導環下蟻取馬力

金參拾圓 砲煩部 機工職手 安永 吉藏

塗裝用「スプレーター」

金貳拾圓 砲煩部 仕上等 吉原 定明

波狀砲（彈丸導環下波狀用）

金拾圓 砲煩部 機工職手 安永 吉藏

右者各肩書ノ考案ヲ爲シ各頭書ノ通光海軍工廠長ヨリ技術賞與ヲ支給セラレタリ

○雜 款

○書類發送ニ關スル件

岩國分校事務ハ概テ岩國海軍航空隊宛書類ニ依リ處理シ來リタ

ル處同隊解散ニ付自今江田島本校宛送付セララルモノニシテ分校ニモ必要ト認メラルル文書ハ凡テ岩國分校宛直接追付ヲ得度 (海軍兵學校岩國分校)

○殘務整理

岩國海軍航空隊殘務整理ハ海軍兵學校岩國分校ニ於テ之ヲ行フ

○本日軍極秘海軍公報第九號(甲配付)發行セリ

○本日普通公報發行セズ

1846

艦本機密第一一號ノ一二六〇五別紙

(昭和十九年八月十九日秘海軍公報)

騒音公試成績表								電圧値0db=1 μ v
沈座中艦外ニ發スル水中可聴音波騒音								音圧値0db=0.01 μ ar
番 號	測回 定次	騒音音源ノ種類	運轉要領	騒音値				記 事
				電 壓 値 db		音 圧 値 db		
				捕音器	捕音器	平 均	平 均	

第四十二號様式(1)

(JES. A4)

1847

騒音公試成績表

沈座中殻外ニ發スル水中超音波騒音

番 號	測 回 定 次	騒音音源ノ種類	運 轉 要 領	測 定 成 績						記 事
				電 壓 値 $0^{db} = 1\mu v$			音 壓 値 $0^{db} = 0.01 bar$			
				10.0K.C	15.0K.C	20.0K.C	10.0K.C	15.0K.C	20.0K.C	

第四十二號様式(2)

(JES. A4)

<p style="text-align: center;">騒音公試成績表</p> <p style="text-align: center;">潜航中各種速力 = 於ケル水中可聴音波騒音</p>														
距離 m	速力 音程 度	原速		微速1		微速2		最微速1		最微速2		潜伏		記事
		()		()		()		()		()		()		
		電圧 db	音圧 db	電圧 db	音圧 db	電圧 db	音圧 db	電圧 db	音圧 db	電圧 db	音圧 db	電圧 db	音圧 db	

第四十二號様式(3)

(JFS. A4)

1849

騒音公試成績表

潜水機各速度ニ於ケル超音波騒音

電圧 0db=1μv

音圧 0db=0.01bar

原速		微速1				微速2				最微速1				最微速2				潜水		記 号	
周波数 K.C	距離 m	騒音		周波数 K.C	距離 m	騒音		周波数 K.C	距離 m	騒音		周波数 K.C	距離 m	騒音		周波数 K.C	距離 m	騒音			
		電圧 db	音圧 db			電圧 db	音圧 db			電圧 db	音圧 db			電圧 db	音圧 db			電圧 db	音圧 db		

第四十二號様式(4)

(JES. A4)

騒音公試成績表

沈座中自艦水中聴音機ニ及ボス騒音程度

第四十二號様式(8)

番 號	測定 回次	騒音音源種類	運轉要領	騒音音 源振動程度	室内 騒音程度	自艦騒音 (整相機最大 位置ニテ)	角 度 (整相機最大 騒音)	事 記
				0db = 1 $\frac{\text{cm}}{\text{sec}^2}$	0phone = $2 \times 10^{-4} \text{bar}$	0db = 1 μv		

(JES. A4)

騒音公試成績表						
潜航各種速力時自艦水中聴音機=及ボス騒音程度						
番 號	運 轉 要 領			電 壓 値 d b	自艦騒音 聴 測 難 易	聴 測 状 況
	速 力	回轉數	電機子 電 流			
1	原 速					
2	微 速 1					
3	微 速 2					
4	最微速 1					
5	最微速 2					
6	潜 伏					
記 事						

(JES. A4)

騒音公試成績表			
潜航中各種速力=依ル影響(妨害音) 0db = 1 μ v			
運動要領		電 壓 値 (デシベル)	自艦騒音ノ聴取狀況
速 力	回轉數		
(1)原 速		潜舵ヲ探リタル場合	
(2)徹 速		同 上	
(3)徹 速		同 上	
(4)最徹速		同 上	
(5)最徹速		同 上	
(6)潜 伏		同 上	
記 事			

(JIS. A4)

秘

1853

海軍公報

第四七七五號

昭和十九年八月二十日(日)
海軍大臣官房

○令 達

内令第九六九號

海防艦 沖

内令提
要登載

右本籍ヲ舞鶴鎮守府ト定メラル

舞鶴鎮守府在籍

海防艦 沖 緬

右警備海防艦ト定メラル

昭和十九年八月十六日

海軍大臣

内令兵第六六號

一四試二五番四號爆彈ヲ兵器ニ採用シ三式二五番四號爆彈一型ト呼稱ス

昭和十九年八月十八日

海軍大臣

内令提
要登載

官房人機密第一六二九號

昭和十九年八月十八日

海軍大臣

關係各所屬長官殿

靖國神社祭祀未済者調査ノ件訓令

秘海軍公報 第四七七五號 昭和十九年八月二十日

支那事變又ハ大東亞戰爭ニ關シ昭和十九年七月三十一日迄ニ死歿シタル左記該當ノ軍人軍屬ニシテ靖國神社ニ合祀未済ノ者ヲ鎮守府司令長官ハ在籍特務士官以下ノ軍人及所屬軍屬ニ就キ、其ノ他ノ所屬長官ハ所屬軍屬ニ就キ調査ノ上別紙書式(戰死戰傷死者ハ甲號書式、病死災厄死者等ハ乙號書式)ノ名簿ニ合祀審査ニ須要ナル關係書類(資料)及戶籍抄本又ハ戶籍記載事項證明書ヲ添ヘ昭和二十年二月二十八日迄ニ本省ニ到達スル如ク提出スベシ

記

- 一 戰死又ハ戰傷ノ爲死歿シタル者
- 二 戰地(事變地)ニ於テ流行病ニ罹リ又ハ自己ノ重大ナル過失ニ因ラズシテ溺水又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ之ガ爲死歿シタル者
- 三 戰地(事變地)以外ノ地ニ於テ戰役(事變)ニ關スル公務ノ爲溺水又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ之ガ爲死歿シタル者
- 四 戰地(事變地)ニ於テ自殺シタル者等ニシテ其ノ情狀合祀ヲ至當ト認ムベキ者

備考

(イ) 艦船沈没、座礁其ノ他遭難ノ場合乗員ニ對シテハ各人ノ證據書類ヲ添付スルノ外當該艦船ノ被害遭難情況等(天候

- (イ) 海狀、救援、救助ノ情況共)ヲ詳記セル調書(關係書類寫、電報寫ニテモ可ナリ)ヲ添附スルヲ要ス
- (ロ) 合祀名簿ハ戰役事變別ニ且甲號書式、乙號書式毎ニ別冊トシ所轄(同一事故ニ因ル死歿者ハ成ルベク取纏メルコト)毎ニ假綴トス
- (ハ) 一連名簿ハ戰役、事變別ニ且甲號書式、乙號書式毎ニ之ヲ調製ス
- (ニ) 官職位階勳等功級及死亡年月日等誤記スルコト無ク且「五十音別名簿」等ノ利用ニ依リ調査ヲ嚴ニシ絶對ニ重複提出ナキ様特ニ注意ヲ要ス
- (ホ) 合祀名簿提出後本省ニ於テ審査ノ間ニ論功行賞發表アリタル場合ニ於テ勳等功級訂正ヲ要スレバ其ノ旨速ニ通報スルモノトス
- (ヘ) 遺族ノ指定ハ妻子(庶子ヲ含ム)、相續人、父母、祖父母、兄弟姉妹、伯叔父母、從兄弟ノ順位ニ依ル但シ義兄弟姉妹ニハ及バザルモノトス尙上記ノ血縁者ナキ場合ニハ故人ノ祭祀ヲ行フ者トス
- (ト) 死亡認定セラレタル者ニシテ死體未收容ノモノハ死亡事由記載例ニ依ルノ外死亡認定ノ根據トナルベキ事項ヲ詳記スルヲ要ス
- (チ) 本名簿ニ添附スベキ戸籍抄本又ハ戸籍記載事項證明書ハ同一戸籍内ニ在ル者ノ全員ノ名及續柄等(事項省略)竝ニ本人死亡事項ヲ記載シアルモノトス

(リ) 事變地トハ昭和十六年十二月七日以前ノ支那及佛領印度支那方面ヲ謂フ

(別紙四葉添)

○通牒

軍務一機密第五七二號

昭和十九年八月十九日

海軍省軍務局長
海軍省醫務局長

各鎮守府(警備府)參謀長
各艦隊參謀長
海軍練習隊參謀長
海軍上衛隊參謀長
海軍航空隊參謀長
海軍衛生隊參謀長

マラリア豫防及治療ニ關スル件申進

首題ノ件ニ關シテハ自今概ネ別冊ニ依リ實施方取計相成度(別冊添)

○雜款

○事務開始

第四十二號海防艦艇裝具事務所ヲ八月三日長崎海軍監督官事務所内ニ設置シ事務ヲ開始セリ

第五十七號驅潛艇裝具事務所ヲ八月十二日北海道函館市辨天町八十八番地函館船渠株式會社内ニ設置シ事務ヲ開始セリ

一、豫防法

一、方 針

(一) マラリア濃厚浸潤地ニ駐屯スル部隊ニシテ主トシテ戦闘ニ従事スル期間ハ藥物内服豫防法及防蚊法中實施容易ニシテ且極メテ有効ナル防蚊液塗布法ヲ、整備ヲ主トスル期間ハ防蚊法ニ重點ヲ置キ且藥物内服豫防法、總員檢血法等ヲ實施ス

(二) マラリア浸潤輕度ナル地ニ駐屯スル部隊ニ在リテハ防蚊法又ハ總員檢血法ヲ主トシ必要ニ應ジ藥物内服豫防法ヲ實施スルモノトス

二、實施要領

マラリア豫防法實施ニ當リテハ先ヅ體力ヲ維持シ得ル榮養ノ保持、睡眠不足過勞等ニ依ル身體抵抗力ノ低下防止ハ本病豫防上極メテ肝要ナルコトヲ銘記セザルベカラズ
而シテ媒介蚊ノ發生ヲ防止シ其ノ飛來ヲ避クルハ最良ノ手段ニシテ其ノ咬刺豫防法ハ之ニ亞ギ藥物内服豫防法ハ最後ノ手段ナルモ戦闘ニ従事スル部隊ニ在リテハ己ムナク藥物内服豫防法及媒介蚊ノ咬刺豫防法ヲ主トシテ採用セザルヲ得ザルヲ以テ各指揮官ハ内服用藥物、塗布用防蚊液其ノ他ノ防蚊劑及ピタミン等ノ榮養劑等マラリア豫防上必要ナルモノノ物件ノ確保ニ努ムルト共ニ豫メ進出豫定地域ノマラリア發生狀況及媒介蚊ノ種類等ヲ調査シ置クヲ要ス

(一) 藥物内服豫防法

第一法

塩規(硫規)

合成マラリア劑甲

合成マラリア劑乙

第二法

硫 規

合成マラリア劑乙

備 考

(1) 第一法ハ主トシテ最前線用、第二法ハ其ノ他ノ場合ニ用フ

(2) 合成マラリア劑乙ナキ場合ハ之ヲ省略スルコトヲ得

(3) 戰訓ニ依レバ藥物内服豫防法ノ効果ハ其ノ服藥徹底ノ如何ニ左右セラルルコト極メテ大ナレバ各指揮官ハ之ヲ徹底ニ萬全ヲ期スル要アリ

(4) 右ノ服用量ニテハ胃腸障碍ヲ來スコトナシ偶々胃腸疾患ヲ有スル者ニ在リテハ他胃劑(例ヘバ苺重散)ヲ併用シ豫防内服ヲ續行ス

(5) 濃厚浸潤地ヲ去リタル後ハ必ず檢血(誘發法後)ヲ行ヒ原虫陽性ナル場合ハマラリア治療ヲ實施スルモノトス

(二) 防蚊法

(一) 蚊ノ飛來豫防
宿舎ノ撰定

媒介蚊ノ一回最大飛翔距離ハ大約一—・五軒ナルヲ以テ原住民部落及媒介蚊ノ發生地ヨリ上記距離ヲ有シ蚊ノ發生地ノ主風向線ヲ避ケ中間地帯ノ清掃ヲ充分行フヲ要ス

(二) 蚊ノ咬刺豫防

マラリア媒介蚊ハ主トシテ日没頃ヨリ夜半ニ掛ケテ飛來咬刺スル特性ヲ有スルモノ多キモ薄暗キ日蔭、防空壕等ニ在リテハ晝間ト雖咬刺スルコトアルヲ以テ次ノ諸事項ニ注意スルノ要アリ

- (1) 夜間歩哨又ハ戦闘ニ従事スル場合ハ豫メ塗布用防蚊液ヲ露出セル皮膚ニ塗布ス
- (2) 汚レタル衣服及黒色ノ衣服ハ成ルベク之ヲ避クルコト
- (3) 室内、防空壕、薄暗キ日蔭、夕刻等ニ於テハ塗布用防蚊液、蚊取線香撒布用防蚊液等ヲ使用シ又長袴及靴下ヲ穿ツモノトス
- (4) 就寢時ニハ蚊帳ヲ用ヒ間隙ナキ様注意スルコト
蚊帳ハ日没前展張スルモノトシ寢臺ヲ使用スル場合ハ蚊帳ノ内面及寢臺ノ下ニフマキユラーノ如キ防臭殺虫劑ヲ撒布シ又ハ蚊ヲ追出シタル後蚊帳ヲ展張ス
- (5) 防蚊設備
 - (イ) 宿舍、便所、浴室、地下室、倉庫ノ窓、通氣孔、出入口ニハ防蚊網ヲ裝備シ(防蚊網不足ナル場合假

令一部分ニテモ或ル程度有効ナルヲ以テ主要部分ノミニテモ裝備ス) 床板、側壁、天井ノ間隙ハ密閉スルモノトス

(ロ) 宿舍ノ周圍ハ約一軒ノ範圍ニ亘リ雜草、竹藪、灌木類ヲ五種以下ニ伐採シ又ハ撈拂ヒ喬木ハ地面ヨリ二米ノ高サ迄ノ下枝ヲ切拂ヒ蚊棲息所ヲ除去スルモノトス但シ好日性媒介蚊ノ發生ノ廣大ナル地域(例ヘバニューギニア)ニテハ伐採ニ依リボウフラノ發生ヲ助長スルコトアルヲ以テ濫ニ伐採セザルコト

(三) 蚊ノ撲滅法

室内、防空壕等ノ晝間薄暗キ場所ニハフマキユラーノ如キ防臭殺虫劑ヲ一日數回撒布シ日没後蚊ノ飛來盛ナル頃ニハ室内ニ蚊取線香、蚊イブシシ、床面及壁面ニハ防蚊液ノ撒布ヲ行フ

(四) ボウフラノ撲滅法

マラリア媒介蚊ハ一般ニ清潔ナル水(眞水、半鹹水)ニ産卵スルヲ以テ極力之ヲ發見驅除ニ努ムルコト
ニューギニア産媒介蚊ノ或種(ブントクトラーツス及モルツケンジス)ハ水ノ清濁ヲ問ハズ發生ス
又媒介蚊ノボウフラハ好日性及嫌日性ノ二種アリ一般ニ悪性ノモノハ好日性ナルモノ多シ

(1) ボウフラノ發生場所
川ノ流ノ淀ミ場所、池、沼、荒蕪水田、湧水、入江、

(2) 處 置

- (イ) 河川ニハ護岸工事ヲ施シテ流水ヲ促ガスコト
- (ロ) 雜草綠藻ハ之ヲ除去スルコト
- (ハ) 操作容易ナル水溜、濕地、溜池、湖沼ハ埋没或ハ除去スルコト
- (ニ) 埋没不可能ナルモノハ溝ニ依リテ河或ハ海岸ニ導水ス但シ溝ノ幅ハ深サノ半分ヲ適當トシ溝ノ深サノ約三十倍ノ地域ヲ乾燥セシムルコトヲ得
- (ホ) 埋没不可能ナル池、沼等ニハアノフエリメツ、フェノチアデン、重油等ノ毒物的藥物ノ撒布ヲ爲シ又ハ藻ヲ嗜食スルタウエスノ如キモノ或ハ媒介蚊ノボウフラヲ嗜食スルタツブミンノウノ如キ小魚ヲ放育ス
- (ヘ) 海岸ノ湧水及濕地ノ水ヲ溝ニテ海ニ導水スル場合ハ滿潮時海水ノ溝内ニ逆流スルコトナキ様自動水門ヲ作ルヲ必要トス
- (ト) 天水桶、水甕、井戸等ニハ蓋ヲ施シ密封シ又井戸ニハ屋根ヲ設クルコト
- (チ) ニューギニアノ如キ好日性媒介蚊ノ發生地ニハ小

- 川、水溜ニ樹葉ヲ水面ニ厚ク布キ詰メ蚊ノ産卵シ不可能ナラシムル方法ヲ取ルコトモ効果的ナリ
 - ジャワ等ニ於テハマンクローフ處女林ニハ一般ニ媒介蚊發生セザルニ付之ヲ伐採ニハ充分注意ヲ要ス
 - (リ) 好日性ノ媒介蚊發生地ノ池、沼及河岸ニハ樹木ヲ植エテ水面ニ日蔭ヲ造ラバ蚊ノ發生ヲ防止乃至抑制スルコトヲ得
 - (×) ジャワノ如キ養魚池、水田ニ發生スル媒介蚊ニ對シテハ水準位動搖法、間歇的乾燥法等ヲ行フ要アルコトアリ
 - (ル) 岩石等多ク清掃作業困難ナル小川ハ其ノ流域數ヶ所ニサイフォン式水門ヲ設ケ間歇的ニ下流ニ奔流ヲ起サシムレバ媒介蚊ノ發生ヲ防止スルコトヲ得
- 以上ノ如クマラリア豫防ニハ土地ニ依リ廣範圍ニ亘ル大規模ノ衛生土木工事ヲ行フ必要アリ
- 附 アノフエリメツ、フェノチアデン及重油ノ使用法
- (1) アノフエリメツ
- アノフエリメツ原劑 九五〇〇ノ割合ニ混合シ(或乾燥土壤、鋸屑等 九五〇〇)ノ割合ニ混合シ(或ハ既ニ混合セル製劑モアリ) 水面ノ雜草、水藻、塵埃等ヲ除去セル後水面一〇平方米毎ニアノフエリメツ原劑〇・一五ヲ混ジタル量ヲ成ル可ク平等ニ撒布シ更ニ竹筴等ヲ用ヒ水面ニ一様ニ灑散セシム
- 本劑ハ魚類及植物ニハ無害ナリ本劑ヲ撒布シタル水ヲ

飲用ニ供スル場合ハ濾過スルヲ要ス一週一回乃至一〇日目ニ一回撤布スレバ「アノフェレス」ノ發生ヲ防止シ得ベシ

(2) フェノチアチン
フェノチアチン原劑
乾燥土壤、鋤屑等
一〇〇・〇〇ノ割合ニ混ジ撤布ス

(3) 撤布要領ハ「アノフェリメツ」ニ準ズ
重油

(1)ノ場合ト同様水面ノ障碍物ヲ除去セル後水面一〇〇平方米毎ニ二〇〇乃至三〇〇立方糶ノ本劑ヲ撤布シ棒或ハ竹箒ノ如キモノニテ水面ニ一様ニ擴散セシム
本劑ハ稻田、耕地ニハ使用シ得ルモ養魚池、飲料水ニハ使用不適ナリ

一週二乃至三回撤布スルヲ可トス

(三) 感染源ノ斐除

マラリア患者及原虫保有者ハマラリアノ感染源ト成リ得ルモノナレバ其ノ發見斐除ハマラリア豫防上極メテ重要ナル一手段ナリ

(1) 部隊總員ニハ狀況ノ許ス限リ一―二週間ニ一回檢血ヲ行ヒ陽性者ハ病室又ハ一定場所ニ隔離治療ス

(2) 已ムナク原住民部落又ハ其ノ近傍ニ宿泊(駐屯)スル場合原住民ハマラリア感染源トシテノ危険極メテ大ナルヲ以テ一軒圈外ニ強制移住セシムルヲ要ス

(3) 原住民ヲ使役スル際ハ左ノ事項ヲ實施スル要アリ

(イ) 無マラリア地乃至成ルベク輕度ノマラリア浸潤地ノ出身者ヲ選ブコト

(ロ) 雇傭時檢診ヲ行ヒ成ルベクマラリア原虫保有者ヲ除クコト

(ハ) 使役原住民ノ住居ハ部隊宿營(駐屯)地ヨリ一軒圈外ニ置クコト

(ニ) 可及的使役者ノ住居ニ防蚊裝置ヲ施スコト
(ホ) 使役者ノ檢血ヲ行ヒ原虫保有者ハ之ヲ解雇ス但

シ解雇セザル場合ハ治療ヲ加ヘ(差當リ稜規一・〇)―一・五―日量三回分服三日間連用程度)夜間ハ隔離スルコト

(四) マラリア豫防班、防蚊日等ノ制定

マラリア浸潤地ニ於ケル部隊ニ在リテハ副長ヲ主班、軍醫長、甲板士官等ヲ幹部トシ數名ノ班員ヨリ成ルマラリア豫防班ヲ設置シ前記マラリア豫防上ノ必要ナル諸作業ヲ實施シ之等諸作業ノ徹底強化ヲ圖ル爲防蚊日ヲ設ケ又ハ防蚊作業ヲ日課中ニ織込ムヲ要ス

特設防疫班派遣セラレアル場所ニ於テハ極力之ニ協力スルモノトス

(五) 人體抵抗力ノ維持増強

病原體ニ對スル人體ノ抵抗力ヲ維持増強スル爲ニハ人體ノ最も良好ナル健康状態ニ保持スルヲ要ス而シテ最も良好ナ

ル健康状態ハ精神ノ緊張、適當ナル運動ト休養トノ按配及充分ナル榮養ノ確保ニ依リ達セラル

(1) 過勞防止

疲勞ハ作業ニ必ズ隨伴スベキ生理的異常現象ナルモ過度ノ疲勞ハ人體ノ抵抗力ヲ消耗シ發病ノ因ヲ爲スハ周知ノ事實ニシテマラリア發病ガ過勞ニ續發シテ起ルコト多キハ戰訓ノ教フル處ナリ而シテ過勞トハ疲勞ノ翌日ヘノ持越シヲ云フ

(イ) 疲勞ハ一夜ノ睡眠ニ依リテ完全ニ拭拂サルル程度ヲ越ユルベカラズ

(ロ) 一般ニ疲勞ハ作業量方或程度ヲ越ユレバ急激ニ増悪シ短時日ノ休養ニ依リ恢復困難ナルヲ以テ作業ニ際シテハ常ニ適度ノ休養ヲ與ヘ疲勞ノ現場消却ヲ期スルヲ要ス

(ハ) 疲勞ハ肉體の作業ノミナラズ精神の負擔ニモ由來スルヲ以テ各級指揮官ハ部隊内ニ明朗爽快ナル雰圍氣ノ醸成ヲ計リ可及的精神的抑壓ノ除去ニ努ムルヲ要ス

(ニ) 疲勞恢復ニハ睡眠コソ最良ノ方法ナルヲ以テ之ガ活用ノ爲萬全ナル處置ヲ講ズベキナリ

(ホ) 熱帶地方ニ於テハ高温作用ノ爲疲勞ノ發現速カニシテ且高温ニ依ル睡眠障碍ガ疲勞ノ恢復ヲ妨害スルコトニ注意セザルベカラズ然レドモ一方高温ハ一般ニ心身ヲ弛緩セシムルヲ以テコノ弛緩セル心身ヲ鞭ツテ作業

セントスル場合ニハ努力ヲ要シ隨ツテ疲勞ヲ増加ス即チ常ニ心身ヲ過度ニ弛緩セシメザル様休養ニ加フルニ適度ナル運動ヲ課スルヲ良策トス
要之各級指揮官ハ疾病防止ニ依ル人的戦力維持ノ爲常ニ部下ノ疲勞状態ニ注意シ作業、睡眠ノ適切ナル配分ト部隊内雰圍氣ノ明朗爽快化等ニ依リ過勞ノ發現防止ニ留意スベキナリ

(2) 良好ナル榮養状態ノ保持

(イ) 現行兵食ハ榮養學的ニ最モ妥當ナル食事ニシテ之ガ完全攝取ニ依リテ良好ナル榮養状態ヲ得ルモノナリ然レドモ其ハ規定食量ノ完全ナル攝取ニ依リ始メテ達セラルルモノニシテ食殘ヲ出サザルコト及ビ充分ナル咀嚼ニ依リ完全ナル消化吸収ヲ圖ルコトコソ肝要ナリ而シテ之ガ爲ニハ常ニ食欲ヲ良好ニ維持スベキ對策ヲ講ズルト共ニ食生活ノ合理化即チ勤勞觀及榮養學ノ物心兩面ヨリセル食物尊崇觀念ノ漸養食事時間ノ延長、食事中ノ食卓明朗化等ヲ期スベキナリ

(ロ) 熱帶地方ニ於テハ一般ニ嗜好偏在ノ傾向アリ殊ニ脂肪ノ攝取不足勝チナルヲ以テ之ガ補給ニハ特殊ノ工夫ヲ要ス

(ハ) 熱帶地方ニ於テハ一般ニ心身弛緩シ消化機能モ亦減弱ヲ免レザルベク消化液ノ分泌減少、胃腸ノ蠕動

緩慢ト爲リ又一方異常醱酵等ノ爲下痢ヲ來タスコトアリ、故ニ食物ハ適當ナル香辛料ノ使用ニ依リ胃液ノ分泌及酸度ノ維持ニ努ムルヲ要ス

(二) ビタミン類ノ缺乏ガ疾病ニ對スル抵抗力ヲ減退セシムルコトハ一般ニ認メラレ居ル所ニシテ且高濕環境ニ於テハビタミン類ノ消費増大スルモノナルヲ以テ之ガ補給ニハ充分意ヲ用ヒザルベカラズビタミンAハ主トシテ動物性食品及葉菜類ノ葉、人參、南瓜、油椰子ノ實等ニ多クビタミンBハ豆類穀物ノ糠、胚芽等ニ多ク動物性食品中ニハ鯨ノ血肉、豚肉等ニ多クシビタミンCハ葉菜、根菜、果實ニ多ク果實中柑橘類ハ殊ニ含有量多シパイヤハ熱帶地方ニ極メテ多産スル果實ナルガ同時ニ重要ナルビタミン補給源ナルヲ以テ之ヲ活用スル要アリ

又ビタミンB及Cハ水溶性ニシテ殊ニCハ熱ニ弱キヲ以テ調理上注意ヲ要ス尙貯藏ニ依ルビタミン類ノ變化ハ主トシテ葉菜類中ノビタミンCニノミ起リシノ他ノビタミンニハ影響少ク根莖類中ノビタミンCハ比較的永ク不變ニ保持サルルモノナリ

以上ノ諸事項ハマラリア豫防上極メテ必要ナルヲ以テ各指揮官ハ之ガ強力實施ニ努ムルヲ要ス而シテ戰況、場所、時等其ノ他ノ事情ニ應ジ重點的ニ取捨選擇シ以テマラリア豫防ノ完璧ヲ期スルコト肝要ナリ

二、治療法

一、方針

- (一) マラリア濃厚浸潤地ニ在リテ主トシテ戰闘ニ従事スル期間ハ藥物内服豫防法ヲ勵行スルヲ建前トスルヲ以テ萬一發病セル場合ハ潜伏或ハ慢性マラリアノ發病ト見做シ之ニ對スル治療法ヲ施行スルヲ要ス
- (二) マラリア浸潤程度ニシテ藥物的内服豫防法ヲ實施セザル地域ニ於テ初メテ發病セル場合ハ新鮮マラリアト見做シ之ニ對スル治療法ヲ施行スルモノトス

二、實施要領

(一) 特殊療法

(1) 主トシテ新鮮マラリアニ對スル治療法

海・A・P法

藥名	一日量	投與期間	一クール全量及日數	備考
合成マラリア劑甲	〇・三	七日	合マ劑甲 二・一	合マ劑ハ狀況ニ應ジ一日量ヲ一回ニ服用スルモノ可ナリ
合成マラリア劑乙	〇・三	五日	合マ劑乙 〇・一五	治療日數一四日

(2) 海・C・P法

藥名	一日量	投與期間	一クール全量及日數	備考
鹽規 (硫規)	一〇〇・一	一日	鹽規 二〇〇	
食直後三回分服			合マ劑乙 〇・一五	

(二)

<p>(1) 海・A・P・E法</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th>薬名</th> <th>一日量</th> <th>投與期間</th> <th>一クール全量</th> <th>備考</th> </tr> <tr> <td>合成マラリンア剤</td> <td>食直後三回分服 〇・三</td> <td>七日</td> <td>合マ剤甲 二・一</td> <td>合マ剤ハ状況ニ應ジ一日量</td> </tr> <tr> <td>体</td> <td>〇・三</td> <td>二日</td> <td>合マ剤乙 〇・一五</td> <td>ニ應ジ一日量</td> </tr> <tr> <td>合成マラリンア剤乙</td> <td>食直後三回分服 〇・五</td> <td>五日</td> <td>鹽酸エビレナミン液 三・三</td> <td>スルモ可ナリ</td> </tr> <tr> <td>鹽酸エビレナミン</td> <td>皮下注射 第一回ハ〇・七cc 第二回ハ〇・三cc 第三回ハ〇・三cc 第四回ハ〇・三cc 第五回ハ〇・三cc</td> <td>全期間 隔日</td> <td>治療日数 一四日</td> <td></td> </tr> </table>	薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考	合成マラリンア剤	食直後三回分服 〇・三	七日	合マ剤甲 二・一	合マ剤ハ状況ニ應ジ一日量	体	〇・三	二日	合マ剤乙 〇・一五	ニ應ジ一日量	合成マラリンア剤乙	食直後三回分服 〇・五	五日	鹽酸エビレナミン液 三・三	スルモ可ナリ	鹽酸エビレナミン	皮下注射 第一回ハ〇・七cc 第二回ハ〇・三cc 第三回ハ〇・三cc 第四回ハ〇・三cc 第五回ハ〇・三cc	全期間 隔日	治療日数 一四日		<p>(2) 海・C・P・E法</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th>薬名</th> <th>一日量</th> <th>投與期間</th> <th>一クール全量</th> <th>備考</th> </tr> <tr> <td>合成マラリンア剤乙</td> <td>食直後三回分服 〇・三</td> <td>五日</td> <td>治療日数 一七日</td> <td>状況ニ應ジ合マ剤ハ一日量スルモ可ナリ</td> </tr> </table>	薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考	合成マラリンア剤乙	食直後三回分服 〇・三	五日	治療日数 一七日	状況ニ應ジ合マ剤ハ一日量スルモ可ナリ	<p>(3) 海・C・P・E法</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th>薬名</th> <th>一日量</th> <th>投與期間</th> <th>一クール全量</th> <th>備考</th> </tr> <tr> <td>鹽酸エビレナミン</td> <td>皮下注射 第一回ハ〇・七cc 第二回ハ〇・三cc 第三回ハ〇・三cc 第四回ハ〇・三cc 第五回ハ〇・三cc</td> <td>全期間 隔日</td> <td>治療日数 一四日</td> <td></td> </tr> </table>	薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考	鹽酸エビレナミン	皮下注射 第一回ハ〇・七cc 第二回ハ〇・三cc 第三回ハ〇・三cc 第四回ハ〇・三cc 第五回ハ〇・三cc	全期間 隔日	治療日数 一四日	
薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考																																											
合成マラリンア剤	食直後三回分服 〇・三	七日	合マ剤甲 二・一	合マ剤ハ状況ニ應ジ一日量																																											
体	〇・三	二日	合マ剤乙 〇・一五	ニ應ジ一日量																																											
合成マラリンア剤乙	食直後三回分服 〇・五	五日	鹽酸エビレナミン液 三・三	スルモ可ナリ																																											
鹽酸エビレナミン	皮下注射 第一回ハ〇・七cc 第二回ハ〇・三cc 第三回ハ〇・三cc 第四回ハ〇・三cc 第五回ハ〇・三cc	全期間 隔日	治療日数 一四日																																												
薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考																																											
合成マラリンア剤乙	食直後三回分服 〇・三	五日	治療日数 一七日	状況ニ應ジ合マ剤ハ一日量スルモ可ナリ																																											
薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考																																											
鹽酸エビレナミン	皮下注射 第一回ハ〇・七cc 第二回ハ〇・三cc 第三回ハ〇・三cc 第四回ハ〇・三cc 第五回ハ〇・三cc	全期間 隔日	治療日数 一四日																																												
<p>備考</p> <p>(1) 原則トシテ海・A・P法ニ依ルモノトス</p> <p>(2) 合マ剤甲無キトキハ海・C・P法ニ依ル</p> <p>(3) 合マ剤甲及乙無キトキハ海・C法ニ依ル</p> <p>(二) 主トシテ陳舊マラリンアニ對スル治療法</p>																																															

<p>(1) 海・C・P・E法</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th>薬名</th> <th>一日量</th> <th>投與期間</th> <th>一クール全量</th> <th>備考</th> </tr> <tr> <td>合成マラリンア剤乙</td> <td>食直後三回分服 〇・三</td> <td>五日</td> <td>治療日数 一七日</td> <td>状況ニ應ジ合マ剤ハ一日量スルモ可ナリ</td> </tr> </table>	薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考	合成マラリンア剤乙	食直後三回分服 〇・三	五日	治療日数 一七日	状況ニ應ジ合マ剤ハ一日量スルモ可ナリ	<p>(2) 海・C・P・E法</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th>薬名</th> <th>一日量</th> <th>投與期間</th> <th>一クール全量</th> <th>備考</th> </tr> <tr> <td>鹽酸エビレナミン</td> <td>皮下注射 第一回ハ〇・七cc 第二回ハ〇・三cc 第三回ハ〇・三cc 第四回ハ〇・三cc 第五回ハ〇・三cc</td> <td>全期間 隔日</td> <td>治療日数 一四日</td> <td></td> </tr> </table>	薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考	鹽酸エビレナミン	皮下注射 第一回ハ〇・七cc 第二回ハ〇・三cc 第三回ハ〇・三cc 第四回ハ〇・三cc 第五回ハ〇・三cc	全期間 隔日	治療日数 一四日		<p>(3) 海・C・P・E法</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th>薬名</th> <th>一日量</th> <th>投與期間</th> <th>一クール全量</th> <th>備考</th> </tr> <tr> <td>合成マラリンア剤</td> <td>食直後三回分服 〇・三</td> <td>五日</td> <td>治療日数 一七日</td> <td>鹽酸エビレナミン液 三・三 ニ應ジ一日量スルモ可ナリ</td> </tr> </table>	薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考	合成マラリンア剤	食直後三回分服 〇・三	五日	治療日数 一七日	鹽酸エビレナミン液 三・三 ニ應ジ一日量スルモ可ナリ
薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考																												
合成マラリンア剤乙	食直後三回分服 〇・三	五日	治療日数 一七日	状況ニ應ジ合マ剤ハ一日量スルモ可ナリ																												
薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考																												
鹽酸エビレナミン	皮下注射 第一回ハ〇・七cc 第二回ハ〇・三cc 第三回ハ〇・三cc 第四回ハ〇・三cc 第五回ハ〇・三cc	全期間 隔日	治療日数 一四日																													
薬名	一日量	投與期間	一クール全量	備考																												
合成マラリンア剤	食直後三回分服 〇・三	五日	治療日数 一七日	鹽酸エビレナミン液 三・三 ニ應ジ一日量スルモ可ナリ																												
<p>備考</p> <p>(1) 原則トシテ海・A・P・E法ニ依ルモノトス</p>																																

- (2) 合マ劑甲無キトキハ海・C・P・E法ニ依ル
- (3) 合マ劑甲及乙無キトキハ海・C・E法ニ依ル
- (4) 休藥日ニハ鹽酸エビレナミン液ノ注射ハ之ヲ行ハズ
- (5) 鹽酸エビレナミン液無キトキハ他ノ誘發法(冷水浴、冷温交互浴、エツクス線照射法等)ヲ施行スルヲ要ス

(三) 原虫保有者治療法

陳舊マラリア治療法ニ準ジ行フ
但シ戰地ニ在リテ實施困難ナル場合ハ鹽酸エビレナミン液ノ注射ハ之ヲ省略スルモ可ナリ

(四) 重症マラリア治療法

(1) 海・A・P・E注射法

藥名	一日量	投與期間	一クール全量及日數
注射用合マ劑甲	〇・三	一日一回腎筋注射	七日合マ劑甲
注射用合マ劑乙	〇・三	一日一回腎筋注射	二日合マ劑乙
注射用合マ劑甲乙	〇・三	一日一回腎筋注射	五日
鹽酸エビレナミン	〇・五	一日一回皮下注射	鹽酸エビレナミン液 三・三―四・五cc 治療日數 一―四日
試驗第一回ハ〇・三ccヲ 試シ副作用ノ強弱及 體重ニ依リ第二回以 後ノ注射量ヲ加減ス			

備考

(1) 注射用合マ劑ナキ場合ハキニ―ネ劑注射液ニcc筋

肉注射ヲ爲シ又ハ右ヲ二五%葡萄糖液二〇cc中ニ加へ極メテ徐々ニ靜脈内ニ注射ス症狀體質ニ應ジ之ヲ一日一乃至三回行フモノトス尙海A・P・E注射法ニ依リ早急ニ治療効果ヲ認メ得ザル場合ニモキニ―ネ注射法ヲ併用ス

- (2) 膈型マラリアニ對シテハ腦脊髄液壓ヲ正常以下ニ低下セシメタル後注射用合マ劑マラリア劑甲〇・〇五―一〇・一ヲ豫メ減菌蒸留水二ccニ溶カシ之ヲ脊髄液約五ccト混和シタル後極メテ徐々ニ脊髄腔内ニ注入
- ※藥液ヲ頭部ニ移行セシムル爲上半身ヲ數分間低位ニ保ツ本法ハ腦症狀輕快ニ至ル迄一日一回連續實施ス
- (3) 胃腸(赤痢)型マラリアニ對シテハ内服法ハ殆ソド無効ナルヲ以テ注射法ニ依リ實施ス
- (4) 肺炎型、氣管枝炎型乃至神經痛型マラリアニ對シテハマラリアノ特殊療法奏効ス

注意

- (1) Aハ合マ劑甲、Pハ合マ劑乙、Cハキニ―ネ、Eハ鹽酸エビレナミン液ヲ意味ス
- (2) マラリア治療法ノ患者日誌記入ニハ各法ノ略名ヲ以テ處方ニ代フ
- (3) マラリア濃厚疫源地ニ於テ有熱患者ニシテ診斷困難ナル場合ハ假令原虫陰性ナリト雖モ一應マラリアヲ疑ヒ之

ガ特殊療法ヲ試ムベシ

一般治療法

最モ有効ナリト信ゼラルル特殊療法ヲ實施スルモ容易ニ再發ヲ起スハ戰爭マラリアノ特殊性ニシテ之方原因ハ體力ノ低下、休養、榮養ノ不足、環境ノ不良、下痢及其ノ他ノ合併症ノ諸因子ガ藥効ヲ低下セシムルニ因ルモノナリ依テ戰爭マラリアノ治療法ニ際シテハ特殊療法ニ加フルニ前記ノ諸點ヲ考慮セル一般療法ヲ實施ハ絕對ニ必要ナリマラリアノ一般療法ハ概ネ左記ニ據ルモノトス

(1) 食 餌

マラリア患者ニ在リテハ部分的榮養不良ニ陥レル場合少カラズ、殊ニ下痢其ノ他ノ合併症ニヨリ榮養ノ衰ヘタル者アルヲ以テマラリア患者ノ食餌ニハ十分注意ヲ拂ヒ榮養價ニ富ミ且ツ消化ノ良好ナル食餌ヲ攝取セシムベク特ニ脂肪(バター)ハ調理ニ用ヒズ三〇―五〇瓦ヲソノ儘麵麩ニ附シテ食セシムレバ下痢患者、肝機能障礙アル者等ニ於テモ吸收良好ナリ)ノ十分ナル攝取ハ榮養ヲ恢復セシムル上ニ極メテ有効ナリ

(2) 休 養

マラリアノ治療期間中ハ安靜ヲ守ラシムルコト絕對必要ナリ然ラザレバ治療困難ニシテ慢性マラリアニ移行スルコト多シ

(3) ビタミン劑

マラリア罹患中ハビタミンノ需要量特ニ増大セルヲ以テ之方十分ナル補給肝要ナリ

- (イ) ビタミンC 一日五〇―二〇〇觔 内服又ハ注射
- (ロ) ビタミンB₁ 一日 一―三觔 内服又ハ注射
- (ハ) ビタミンB₂ 一日 一―三觔 主トシテ内服
- (ニ) ビタミンA、D 榮養衰ヘタル者 又ハビタミンA 缺乏症アル者ニ一日一―二個投與

(4) 鐵 劑

マラリア患者ニ於テハ概ネ貧血ヲ伴ヒ之方高度ナル者ニ於テハマラリアノ治療極メテ困難ナルヲ以テ貧血ノ治療肝要ナリ

(イ) 還 元 鐵

- 一〇瓦一日量 食後三回分服 三日間
- 二〇瓦一日量 食後三回分服 四日間
- 三〇瓦一日量 食後三回分服 約二週間
- 〇・三瓦(三個) 一日三回服用 七日間
- 〇・六瓦(六個) 一日三回服用 約二週間

(ロ) 鹽化第一鐵

註 胃酸缺乏セルトキハ鐵劑ノ吸收不良ナルヲ以テ稀鹽酸ヲ併用ス又胃腸障礙ヲ招來セル時ハ其ノ程度ニ應ジ鐵劑ノ増量ヲ加減ス

(5) 輸 血

二〇〇―五〇〇cc 必要ニ應ジ毎日又ハ隔日實施ス
乾燥血漿
貧血又ハ低蛋白血症ニ因ル浮腫アル者及榮養不良ニ陥レ

<p>ル者ニ對シテハ乾燥血漿ノ注射ハ有効ナリ 乾燥血漿二〇〇—五〇〇cc必要ニ應ジ毎日又ハ隔日靜脈注射</p> <p>(7) 食鹽 重症マラリアニ於テハ食鹽ノ缺乏(低鹽素血症)アルコト少カラザルヲ以テ之ガ補給肝要ナリ</p> <p>(イ) 生理的食鹽水、リンゲル液、ロツク液、グリノーゲン(六一〇%液)等各五〇〇—一、〇〇〇cc必要ニ應ジ毎日或ハ隔日皮下又ハ靜脈注射</p> <p>(ロ) 食鹽八一〇五ヲ〇・五—一・〇%液トシテ飲用セシム</p> <p>(8) 二五%葡萄糖液四〇—五〇cc必要ニ應ジ毎日一—二回靜脈注射</p> <p>(9) 強心劑 重症マラリアハ急性循環障礙ニテ死ノ轉歸ヲ取ルコト少カラザルヲ以テ常ニ循環機能ニ十分注意ヲ拂ヒ適時適當ノ強心劑ヲ使用スルヲ要ス</p> <p>(イ) アミノコルチン注射液 (コラミン、キオシン、コルニヂン、レホルミン等) 一日二—三個靜脈又ハ皮下注射</p> <p>(ロ) カンフル劑注射液 一日二—三個皮下又ハ筋肉注射</p> <p>(ハ) ビタカンファー又ハカンフェニール</p>	<p>症狀ニ應ジ一日三—一〇個靜脈、皮下又ハ筋肉注射</p> <p>(ニ) ストロファンチン注射液 急性心臟衰弱ニ對シテハ該注射液一個(KGストロファンチンハ〇・〇五瓩)ヲ二五%葡萄糖液二〇ccニ混和シ徐々ニ靜脈注射ヲ行フ</p> <p>其 他</p> <p>(10) (イ) マラリア劑ヲ投與スルモ下熱セザル場合ハメチレン青〇・一—〇・三ヲ膠囊ニ入レ併用スレバ下熱スルコトアリ</p> <p>(ロ) 厥冷型マラリアニ對シテハホミカチンキ一・〇—二日量(例鹽ホ水)ノ併用有効ナリ</p> <p>(ハ) 治療困難ナルマラリアハ出來得レバ清涼ナル地例ヘバ一、〇〇〇米以上ノ高山ニ於テ治療スルモノトス</p> <p>(終)</p>
---	--

(官房人機密第一六二九號別紙) 甲號書式(用紙美濃紙)

(昭和十九年八月二十日海軍公報)

靖國神社合祀海軍軍人軍屬名簿

何 領 守 府
又ハ 何 艦 隊 等

官(職)位勳功爵氏名	生年 月日	本籍 地	遺族		所屬 艦船部隊	死亡事由	死體 收容ノ有無	死亡年月日
			現住 所	遺族 氏名				
					軍艦何、第何驅逐隊、何特別陸戰隊、何航空隊等(准士官以上ハ上記ノ外艦隊又ハ領守府名等ヲ括弧内ニ記入ス)	驅逐艦何乘組掌機長トシテ昭和何年何月何日何々攻略作戦ニ於テ艦室ニ在リテ戰闘中「ボルネオ」北西岸何々沖合北緯何度何分東經何度何分ニ於テ敵飛行艇ト交戦ノ際爆撃被害ノ爲沈没艦ト運命ヲ共ニシ戦死ト認定		
					第何警備隊何々トシテ昭和何年何月何日海南島何縣何々討伐戰闘中敵小銃彈右胸部ニ命中何月何日何海軍病院ニ於テ右胸部首管機銃損傷ニ因リ戦死			
					又ハ 何々特別陸戰隊何々トシテ昭和何年何月何日「ニューブリテン」島何々ニ於テ對空戰闘中敵機ノ機銃ニ因リ頭部首管機銃創右肩胛部首管機銃創損傷ヲ受ケ戦死			
					又ハ 何海軍航空隊何々トシテ昭和何年何月何日「マインヤル」群島「タロア」島北東方約何哩ノ地點ニ於テ敵機動部隊ト交戦中砲火ヲ被リ且敵戰闘機ト空戰ヲ交ヘタル後自爆戦死(僚機之ヲ確認ス)			
					又ハ 何海軍航空隊何々トシテ昭和何年何月何日「ツラギ」ノ何度何哩ニ敵機動部隊ヲ發見之ニ觸接中消息ヲ絶テ戦死ト認定			
					又ハ 何海軍航空隊何々トシテ昭和何年何月何日「ボートモレスビー」港内敵艦爆撃ノ際敵機ト交戦敵機銃彈ヲ受ケ右側胸部腹部貫通機銃創ニ因リ機上戦死			

(註)

- 一本名簿ニハ戸籍抄本又ハ戸籍記載事項證明書ノ外、戦死者報告書、事實證明書、現認證明書、診斷書、死亡診斷書等ノ書類(寫)共ハ他合祀審査ニ須要ナル關係書類(寫)等ノ資料一切ヲ必ズ添付スルヲ要ス
右資料及死亡事由欄記載事項不備ナルモノハ後日審議トナルコトアルベシ
- 一本名簿ニハ支那事變又ハ大東亞戰爭ニ關シ昭和十二年七月七日ヨリ同十九年七月三十一日迄ノ間ニ於テ戦死又ハ戦傷ノ爲死歿シタル軍人軍屬ニシテ靖國神社ニ合祀未済ノ者ヲ記載ス
- 軍屬ニ在リテハ本記載例ニ依ルノ外死亡事由欄ニ戦死又ハ戦傷ヲ受ケタル當時ノ任務、死亡事由等合祀判定ノ基礎要項ヲ詳記シ同欄末尾ニ宣誓ノ有無及採用年月日、死亡時ノ舊官職名ヲ附記ス尙雇員、傭人等ニ在リテハ職名欄ヲ左ノ通記載ス
- 雇員(理事生)、傭人(工作手)、工員(鑄工職手)等
一本名簿ハ一枚ニ一名限リ記載ス

(官房人機密第一六二九號別紙)
一連名簿ノ書式 (用紙模造半葉野紙)

(昭和十九年八月二十日祕海軍公報)

大東亞戰爭		靖國神社合祀一連名簿		何領守府		
記	事	所轄	死亡年月日	官(職)	氏名	
		如月	昭、一六、二二、一一	功五、旭四	特 大 尉	、
		〃	〃	功五、雙光	機 特 中 尉	、
		〃	〃	功六、單光	特 少 尉	、
		〃	〃	功六、旭五	機 特 少 尉	、
		〃	〃	功六、旭六	兵 曹 長	、

(註) 名簿ハ二通調製ノコト

(官房人機密第一六二九號別紙) 乙號書式(用紙美濃紙)
靖國神社合祀海軍軍人軍屬名簿

(昭和十九年八月二十日秘海軍公報)
又 何 鎮 守 府
又 何 艦 隊 等 府

官(職)位勳功爵氏名	生年 月 日	本籍 地	遺族		所屬艦船部隊	死 亡 事 由	死體 收容 の有無
			現住 所	續柄及氏名			
					軍艦何、第何驅逐隊、何特別陸戰隊、何航空隊等(准士官以上ハ上記ノ外艦隊又ハ鎮守府名等ヲ括弧内ニ記入ス)		有又ハ無
					何々乗組トシテ馬來方面作戰ニ從事シツツアリシ處乘艦何々ハ敵潜水艦攻撃ノ爲昭和何年何月何日佛領印度支那何々島外ニ出撃當時本人ハ後部機関室ニ於テ發電機ノ運轉狀況ヲ検査中敵潜水艦見總員配置ニ就テ砲戰用意ノ傳令アリタルヲ以テ鐵梯ヲ陞ケ上リタル際轉航ト長溝ニ依ル艦ノ大傾斜ノ爲靴ヲ滑ラセ共ノ場ニ轉倒傷ニ在リタル重油タンク汚水汲取口ニ胃部ヲ強打同日室戸海軍病院ニテ急性腸臟壞死ニ因リ戰病死		
					昭和何年何月何日ヨリ軍艦何々乗組何方面ニテ勤務ノ處同何年何月何日ボルネオ沿岸ニテ公務ノ爲肺結核ニ罹リ何月何日海軍病院ニ入院同年何月何日海軍病院ニ於テ戰病死		
					昭和何年何月何日ヨリ第何警備隊何々トシテ勤務ノ處同何年何月何日海南島何縣何ニテ何作業ニ從事中海中ニ墮落行方不明トナリ何地ニ於テ死體發見溺水ト確認		
					昭和何年何月何日ヨリ何々ニテ何々トシテ勤務ノ處何年何月何日支那何省(何地)ニテ公務ノ爲何病ニ罹リ何年何月何日兵役免除何年何月何日何病院(何地)(何)ニ於テ死亡		

(註)

- 一 本名簿ニハ戸籍抄本又ハ戸籍記載事項證明書ノ外、實證明書、現認證明書、診斷書、死亡證明書等ハ、本名簿ニハ記載スルニ要ス。須要ナル關係書類(寫)等ノ資料一切ヲ必ズ添付スルヲ要ス。
- 二 本名簿ニハ支那事變又ハ大東亞戰爭ニ關シ昭和十二年七月七日ヨリ同十九年七月三十一日迄ノ間ニ於テ左ノ各號ノ一ニ該當スル軍人軍屬ニシテ靖國神社ニ合祀未済ノ者ヲ記載ス。
- (イ) 戰地(事變地)ニ於テ流行病ニ罹リ又ハ自己ノ重大ナル過失ニ因ラズシテ溺水又ハ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ之ガ爲死シタル者
- (ロ) 戰地(事變地)以外ノ地ニ於テ戰役(事變)ニ關スル公務ノ爲溺水又ハ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ之ガ爲死シタル者
- (ハ) 戰地(事變地)ニ於テ自殺シタル者等ニシテ其ノ情狀合祀ヲ至當ト認ムベキ者
- 三 戰地(事變地)以外ノ地ニ於ケル溺水、傷病及疾病ニ依ル死歿者ハ戰役(事變)ニ直接關係スル公務ニ基因シ戰役(事變)ノ功績特ニ顯著ナル者ニ就キ詮議ス
- 四 傷病、疾病ニ依ル死歿者ハ其ノ負傷又ハ發病ノ日ヨリ概ネ三年以内ニ於テ死歿シタル者ニ就キ詮議ス
- 五 軍屬ニ在リテハ本記載例ニ依ルノ外死亡事由關シ溺水又ハ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタル當時ノ任務、死亡事由等合祀判定ノ基礎事項ヲ詳記シ同欄末尾ニ宣誓ノ有無及採用年月日、死亡時ノ舊官職名ヲ附記ス尙原員、傭人等ニ在リテハ職名欄ヲ左ノ通記載ス
- 原員(通稱)、傭人(操船手)、工員(一等検査員)等
- 六 兵役免除又ハ退職後自宅等ニ於テ死亡シタルモノハ前號ノ書類ノ外地方醫師ノ診斷書ヲ添付ス
- 七 本名簿ノ下部欄外ニ別紙書式ノ附箋ヲ貼附ス
- 八 本名簿ハ一枚ニ一名限リ記載ス

(官房人機密第一六二九號別紙)
乙號合祀名簿ニ附スル附箋書式

(昭和十九年八月二十日海軍公報)

勤務處	熊野第十六警備隊	×	戰地(事變地)		勤務
			始期	終期	
			七、六、七、六、七、四、二、二、六	南、南、平、面、日	九月八日
			七、八、五、一、四、一、四	支、支、支、支、支	三月十四日
計					九月八日
發病年	昭十七年七月十三日				
及需診場年	昭十七年八月十四日				
死亡時傷病名	肺結核				
死亡場所及傷別	吳病院				
死亡年	昭十七年十二月七日				
記事	需診時ハ慢性氣管支炎				

(註)

一 戰地(事變地)勤務

(イ) 艦船乗員ノ戰地(事變地)勤務ハ當該艦船ノ加算始終期ニ依ル
(ロ) 赴任等ノ場合艦船乗中ノ期間ハ除算シ着任ノ日ヲ以テ始期トシ退艦ノ日(入院入室等ヲ命ゼラレタル場合ハ其ノ日)ヲ以テ終期トス

二 始終期ノ記載方法

(イ) 戰地(事變地)ニ引續キ勤務ノ場合
連日引續キ戰地(事變地)勤務ノモノハ其ノ最初ノ月日ト最後ノ月日トヲ記載シ勤務日數ヲ計算ス

(ロ) 連月戰地(事變地)勤務アルモノハ途中ニ於テ一時内地歸着等ノ場合ニ於ケル始終期ノ記載方法ハ前號ノ通ナルモ日數ノ計算ハ一時内地歸着(戰地事變地外勤務)ノ間ハ除算シ實際戰地(事變地)ニ勤務セル日數ヲ算出ス(加算調書等ニ依ルコト)

此ノ場合別紙例示ノ如ク始終期欄ニ×印ヲ附ス

秘

1869

海軍公報 第四七七六號

昭和十九年八月二十一日(月)
海軍大臣官房

○令 達

達第二六八號

海軍有線通話規程草案別冊ノ通定ム

(別冊ハ海軍文庫ヲシテ所要ノ向ニ之ヲ配付セシム)

昭和十九年八月十八日

海軍大臣 臣

官房人機密第一六三四號

鎮守府司令長官ハ在籍特務士官、准士官及下士官中沼津海軍工
作學校築城施設關係教官又ハ教員等ニ充ツル爲該勤務ニ必要ナ
ル學課ヲ部外ニ依託受講セシメタル者ニシテ將來築城施設關係
勤務ニ服セシムルヲ適當ト認ムルモノニ就キ其ノ専修科目ニ應
ジ昭和十九年九月一日附之ヲ専修科工作術ノ各特定工業ヲ履修
シタルモノト看做スコトヲ得
前項ニ依リ専修科工作術ノ各特定工業ヲ履修シタルモノト看做
シタル准士官及下士官ニシテ工作科以外ノモノハ同日附現官階
ト同等ノ工作科准士官又ハ下士官ニ之ヲ任用スルモノトス
昭和十九年八月十九日

海軍大臣 臣

秘海軍公報 第四七七六號 昭和十九年八月二十一日

官房需第二〇九號

昭和十八年官房需第二〇九號中左ノ通改正ス

昭和十九年八月十九日

海軍大臣 臣

別表第一乃至第四中「精米」ヲ「米」ニ、「精麥」ヲ「麥」ニ
改ム

別表第一備考中第六號ヲ削リ第七號ヲ第六號トシ以下順次繰上
グ

(参照) 海軍會計法規類集二卷三三〇ノ二ノ二頁

官房人機密第一六三九號

昭和十七年官房機密第一三六一一號及昭和十九年官房機密第一
一三號ニ依リ講習修了者ハ昭和十九年九月一日現在員ニ就キ左
ニ依リ之ヲ海軍通信學校特修科電信術練習生ノ交信班ヲ専修シ
タルモノト看做ス之方取扱ニ關シ左ノ通定ム
昭和十九年八月二十一日

海軍大臣 臣

一 特務士官及准士官ニ在リテハ准士官ニ進級ノ際高等科電信
術章ヲ有シタル者ニシテ在籍鎮守府司令長官ニ於テ適當ト認
ムルモノ

一一三一

二 下士官及兵ニ在リテハ昭和十九年九月一日現ニ高等科電信
術章ヲ有スルモノトシ鎮守府司令長官ハ左ニ依リ特技章ヲ付
與スルモノトス

(イ) 特技章付與期日ヲ昭和十九年九月一日トス
(ロ) 特技章成績順位ハ高等科電信術練習生教程卒業成績順位
トス

(參照) 昭和十七年官房機密第一三六一號及昭和十九年官房機密
第一一三號ハ臨時通信術(對航空機)講習施行ノ件ナリ

○ 通 牒

官房機密第四四六號

昭和十九年八月十八日

海 軍 省 副 官

關係各廳長殿

有線通話制限ニ關スル件通知

官房機密第三四九號ニ依ル首題ノ件ハ廢止セラレ候

(六月十六日 本欄參照)

兵備一機密第一號ノ三七一

昭和十九年八月十八日

海 軍 省 兵 備 局 長

關係各廳長殿

海軍有線通話規程草案ニ關スル件申進

今般達第二六八號ヲ以テ定メラレタル首題ノ件ハ作戰關係通話
ノ迅速回滑ヲ期スル爲メ制定セラレタルモノニ付通話手ハ勿論通
話者ニ周知徹底セシメラルル共ニ左記事項ニ關シテハ特ニ之
ヲ勵行セシムル様可然取計相成度

記

一 通話種別及順位ヲ警報(防空)、作戰緊急通話、緊急通話、
至急通話、普通通話トシ作戰關係通話ノ迅速回滑ヲ期スル爲
之方取扱法ヲ定メラレタルニ付通話内容ニ應ジ之方實施ヲ適
切ナラシムルコト

二 境域外通話ニ在リテハ空襲警報又ハ警戒警報發令中ハ夫々
至急通話以下又ハ普通通話ノ使用ヲ禁止スルコトニ定メラレ
タルニ付防空警報發令中ハ作戰關係通話ヲ回滑ナラシムル爲
不急ノ通話ヲ極力行ハザルコト

三 境域外通話ニ於テハ通話者ハ原則トシテ高等官ニ限定シ且
通話時間ヲ十分間以内ニ制限スルコトニ定メラレタルニ付極
力有線通話ノ濫用ヲ避クルコト

四 退廳後ニ於ケル通話閑散ナル時期ヲ有効ニ利用スル爲各廳
當直者ニ通話ヲ依頼スル方式ヲ定メラレタルニ付之方實施ヲ
適切ナラシムル爲各廳ニ於テ責任者ヲ定メ通話手ニ通達シ成
ルベク之ヲ利用スルコト

兵備三機密第七三八號

昭和十九年八月十八日

海軍省兵備局長

各艦隊參謀長
各鎮守府參謀長
各警備府參謀長
各在勤海軍武官 殿

海流通報ニ關スル件申進

海軍海流通報實施規程ニ依リ實施中ノ無線海流通報ノ放送ハ昭和十九年九月一日以降當分ノ間中止ノコトニ定メラレ候

軍需類第一三五號

昭和十九年八月十九日

海軍省軍需局長

關係各廳長殿

米麥品名改正ニ關スル件通牒

今般官房需第二〇九號ヲ以テ首題ノ件發令相成候處右ハ左記ニ依ルモノニ有之候條之方實施ニ關シテハ可然指導相成度

記

一米

精米

從來補給上其ノ他ノ必要ニ依リ一部玄米ノ整理名ニテ供給シタルコトアリシモ名稱ノ關係上之方整理ニ付疑義ノ向アリシト一方現地部隊等ニ於テハ現地取得其ノ他ノ事情ニ依リ玄米ノ給與ヲ必要トスル場合アルベキコト等ヲ考慮シ其ノ實情ニ即應シ適宜運用ヲ回滑ナラシムル爲「米」ト改正セラレタルモノニシテ一般ノ立前トシテハ從來通玄米ニ對シ摺上リ重量比九割七分ヲ標準トスルコトニ何等變更ナキモノナリ

秘海軍公報 第四七七六號 昭和十九年八月二十一日

二麥

米ノ改稱ニ關聯步調ヲ一ニスル爲改正セラレタルモノニシテ實際給與ハ從來通ノ精麥ヲ立前トスル義ニ有之從テ從來ト實質上變更ナキモノナリ

教育機密第二九九號

昭和十九年八月十九日

海軍省教育局長

各鎮守府參謀長殿

各科豫備補習生(通信科ヲ除ク)教育實施場所ニ關スル件申進

海軍豫備補習生規則第十六條ニ依ル首題ノ件當分ノ間左記ノ通定メラレ候

記

横須賀鎮守府 濱名海兵團
吳鎮守府 大竹海兵團
佐世保鎮守府 相浦海兵團
舞鶴鎮守府 平海兵團

○雜款

○開隊

入吉海軍航空隊出水分遣隊ハ八月十五日第二出水海軍航空隊トシテ開隊ス
轉勤者ハ鹿兒島本線米ノ津驛下車(約五籽)
(第二出水海軍航空隊)

一一三三

<p>○廳舎移轉 船舶警戒部室蘭支部ハ八月一日左ニ移轉セリ 室蘭市西小路町三番地(電話五〇三番)</p>	<p>○事務開始 第三百二十四設營隊ハ八月一日鹿兒島縣第二鹿屋海軍航空隊内ニ於テ事務ヲ開始セリ 第四十四號海防艦艇裝員事務所ヲ八月三日長崎監督官事務所内ニ設置シ事務ヲ開始セリ</p>	<p>○事務所撤去 伊號第三百六十七潛水艦艇裝員事務所ハ八月十日之ヲ撤去セリ 第六號輸送艦艇裝員事務所ハ八月十日之ヲ撤去セリ</p>	<p>○殘務整理 第百二十五防空隊ハ七月二十日附解隊殘務整理ハ硫黃島警備隊内ニ於テ之ヲ行フ</p>	<p>○保健場開設 左記温泉ヲ保健場ニ指定セラレ契約締結済ニ付昭和十九年機密高雄警備府法第一四號ニ依リ利用差支無之候 記 四重溪温泉(高雄州恒春郡車城庄)</p>																												
<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">計</th> <th colspan="3">宿泊施設</th> <th colspan="2">収容</th> </tr> <tr> <th>山口旅館</th> <th>はまつ旅館</th> <th>博陽館</th> <th>准士官以上</th> <th>下士官兵</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>伊豆屋</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>七</td> <td>一〇</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>一三</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>一七</td> <td>一〇</td> </tr> <tr> <td></td> <td>六二</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>(高雄海軍經理部)</p>		計	宿泊施設			収容		山口旅館	はまつ旅館	博陽館	准士官以上	下士官兵	伊豆屋	〇	〇	〇	七	一〇	計	一三	〇	〇	一七	一〇		六二					<p>○轉勤者赴任先 「第二五二航空隊」「戦闘第三二五飛行隊」「戦闘第三一六飛行隊」「戦闘第三一七飛行隊」ヘノ轉勤者ハ千葉縣長生那茂原航空基地(房總東線「茂原」驛下車)ニ向ケ赴任(旅費ハ茂原迄前金拂但シ家族移轉料支給上ノ勤務地ハ館山市)ノコトニ取計ハレ度 (第二五二航空隊)</p>	<p>○正誤 七月二十日海軍公報(部内限)通牒欄下段車務一機密五九二號件名ノ項中「定數準備」ハ「定數標準」ノ誤</p>
計	宿泊施設			収容																												
	山口旅館	はまつ旅館	博陽館	准士官以上	下士官兵																											
伊豆屋	〇	〇	〇	七	一〇																											
計	一三	〇	〇	一七	一〇																											
	六二																															

秘

1873

海軍公報 第四七七七號

昭和十九年八月二十二日(火)
海軍大臣官房

○令 達

内令第九七二號

艦船令ノ特例ニ關スル件左ノ通定メラル

昭和十九年八月十八日

海軍大臣

内令提
要登載

大東亞戰爭中艦長ハ副長ヲ置カザルトキ又ハ缺員中若ハ事故アリテ其ノ職務ヲ執ルコト能ハザルトキハ艦船令第十四條ノ規定ニ拘ラズ部下ノ將校、豫備將校及兵科特務士官ヲシテ其ノ席次ニ從ヒ副長ノ職務(艦船令第十六條第一項及第二項ノ場合ヲ含マズ)ヲ執行又ハ代理セシムベシ

(諸例則卷一、四七二頁參照)

内令第九七三號

艦船職員服務規程第百三十八條及第百四十七條ノ規定ハ昭和十九年内令第九七二號ニ依ル副長ノ職務執行者又ハ代理者ニ之ヲ適用セザルモノトス

昭和十九年八月十八日

海軍大臣

内令提
要登載

(諸例則卷一、四九六頁參照)

内令兵第六七號

砲用無煙火藥戰時領收發射試驗規則別冊ノ通定ム
別冊ハ海軍艦政本部長ヲシテ所要ノ向ニ之ヲ配付セシム

昭和十九年八月二十一日

海軍大臣

内令提
要登載

○通 牒

兵備四機密第八一五號

昭和十九年八月二十一日

海軍省兵備局長

關係各廳長殿

昭和二十年度戰時召集延期候補者ノ追加ニ關スル件照會

本年兵備四機密第五〇〇號(五月二十日海軍公報部内限參照)戰時召集延期實施要領(一般用)第七號ニ依ル首題ノ件別紙様式ニ依リ海軍省軍需局、同醫務局、海軍艦政本部、海軍航空本部及海軍施設本部關係ノ各廳及民間工場在職者ニ付テハ夫々當該部局ニ於テ其ノ他ノ各廳在職者ニ付テハ海軍省兵

海軍公報 第四七七七號 昭和十九年八月二十二日

一三五

備局ニ於テ取纏メノ上來九月五日迄ニ海軍省ニ到達スル様具申
セラレ度

追テ外地ニ在ル廳ニ於テハ所在地管轄ノ陸軍最高指揮官ニ協
議スルモノトシ本具申ニハ不及、尙具申期日迄ニ海軍省ニ到
達ナキモノハ失效トナルニ付了知相成度

(別紙添)

教育機密第二九七號

昭和十九年八月十七日

海軍省教育局長
海軍省人事局長

各鎮守府參謀長
各警備府參謀長
各艦隊參謀長
各練習隊司令官
吳練習隊司令官
吳防備隊司令官
關係各所轄長

海軍豫備學生出身海軍少尉實務練習ニ關スル
件通知

來ル九月一日其ノ教育ヲ終了シ海軍少尉任用豫定ノ首題海軍少
尉中海上ノ勤務ヲ主トスル者ニ對スル實務練習ハ達第二一七號
實務練習規則ニ基キ左記ニ依リ實施ノコトニ定メラレ候條了知
相成度

記

番號	出身校名	種別	員數	期間	實施練習	記	事
一	對港校	艦艇班	約二〇名	自九月一日 至十月十日	吳助備隊		
二	航校	航海班	約三〇名		吳練習隊	實務練習中ノ配 置ハ航海長附又 ハ運用分隊長ノ 一ヲ修得セシム	
三	工機校		約一〇名		主トシテ 海防艦		
備考	トアリ 狀況ニ依リ實務練習期間中第一線部隊等ニ配員セシメラルルコ						

○ 雜 款

○ 限隊
滋賀海軍航空隊分遣隊ハ八月十五日兵庫縣川邊郡小濱村川
面ニ開隊セリ

順路 福知山線寶塚驛下車(○・五軒)
阪急寶塚線寶塚驛下車(○・三軒)ノ方便利ナリ
(滋賀海軍航空隊)

○ 事務所移轉
海軍功績調査部ハ左ニ移轉セリ

橫濱市港北區日吉町 海軍省第八分室

○ 事務所撤去
三重海軍航空隊分遣隊(假稱)事務所ハ八月十五日之ヲ撤
去セリ
(三重海軍航空隊)

(兵備四機密第八一五號別紙)

昭和二十年度戰時召集延期候補者追加調査表 (技術系)

(昭和十九年八月二十二日海軍公報)

昭和十九年八月二十日調

業務 種別名	海軍部隊官衛學校在職者	調査		國民學校	部局工場 所在地	合計	子女 總員數	入營 人員數	應召 人員數
		官廳名	海軍省						
在職男子 總人員數	區分	歸還者	計	歸還者	計	計			
		其ノ他者		其ノ他者					
在職兵役關 係者人員數	既ニ配當セ ラレタル 召集延期 候補者 人員數	今回新 タニ配 當スル 人員數	今回新 タニ配 當スル 人員數	今回新 タニ配 當スル 人員數	今回新 タニ配 當スル 人員數	今回新 タニ配 當スル 人員數			
山要ニ 配當ス ル事	今回新 タニ配 當スル 人員數	今回新 タニ配 當スル 人員數	今回新 タニ配 當スル 人員數	今回新 タニ配 當スル 人員數	今回新 タニ配 當スル 人員數	今回新 タニ配 當スル 人員數			

備考

- 一 本表ハ技術系ノ者ト事務系ノ者トニ分子別紙トシ調製スルコト
- 二 事由ハ詳細且具體的ニ記入スルコト
- 三 用紙ノ大サハ日本標準規格B列5號トスルコト

秘

1876

海軍公報

第四七七八號

昭和十九年八月二十三日(水)
海軍大臣官房

○令 達

内令第九七〇號

右本籍ヲ吳鎮守府ト定ム

第九十九號驅潛特務艇

要登載

第二百七號驅潛特務艇

右本籍ヲ佐世保鎮守府ト定ム
昭和十九年八月十七日

海軍大臣

内令第九七一號

昭和十八年内令第一八三三號別表中左ノ通改正ス
昭和十九年八月十七日

要登載

海軍大臣

佐伯防備隊ノ項驅潛特務艇ノ欄「第九十八號(吳)」ノ次ニ

「第九十九號(吳)」ヲ加フ

佐世保防備隊ノ項驅潛特務艇ノ欄「第二百號(佐)」ノ次ニ

「二百七號(佐)」ヲ加フ

(内令提要卷三、四八ノ二一頁參照)

内令第九七四號

第九十五號驅潛特務艇

要登載

右本籍ヲ舞鶴鎮守府ト定ム

昭和十九年八月十八日

海軍大臣

内令第九七五號

昭和十八年内令第一八三三號別表中左ノ通改正ス
昭和十九年八月十八日

要登載

海軍大臣

舞鶴防備隊ノ項驅潛特務艇ノ欄「第八十四號(舞)」ノ次ニ

「第九十五號(舞)」ヲ加フ

(内令提要卷三、四八ノ二一頁參照)

内令第九七六號

右吳鎮守府所管ト定メラル
昭和十九年八月十九日

昭和十九年八月十九日

海軍大臣

第五十七號特設輸送艦

要登載

内令第九七七號

驅逐隊編制中左ノ通改定セラル
昭和十九年八月二十日

要登載

秘海軍公報 第四七七八號 昭和十九年八月二十三日

一一三七

第二十二驅逐隊ノ項ヲ削ル
第三十驅逐隊ノ項中「秋風」ノ下ニ「皐月、夕風」ヲ加フ
(内令提要卷一、六八頁参照)

海軍大臣

内令第九七八號

特設聯合通信隊編制中左ノ通改定セラル

昭和十九年八月二十日

海軍大臣

第三聯合通信隊ノ項ヲ削ル
(内令提要卷一、一五六頁参照)

内令第九七九號

右本籍ヲ横須賀鎮守府ト定ム
第百九十三號驅潛特務艇

昭和十九年八月二十日

海軍大臣

内令第九八〇號

昭和十八年内令第一八三三號別表中左ノ通改正ス

昭和十九年八月二十日

海軍大臣

千島方面根據地隊ノ項驅潛特務艇ノ欄「第二百九號(横)」ノ前

ニ「第百九十三號(横)」ヲ加フ
(内令提要卷三、四八ノ二頁参照)

内令第九八一號

左ノ船舶ヲ特設艦船トシ其ノ種別及所管ヲ左ノ通定ム

昭和十九年八月二十日

海軍大臣

船舶名 特設艦船種別 所管

漁船白鳥丸		
同宮城丸		
同ふさ丸	特設監視艇	横須賀鎮守府
同岩手丸		
同武藏丸		
同大東丸		

内令第九八二號

昭和十八年内令第二五六六號別表中左ノ通改正ス

昭和十九年八月二十日

海軍大臣

横須賀防備隊ノ項特設監視艇ノ欄ニ「白鳥丸(横)、宮城丸(横)、ふさ丸(横)、岩手丸(横)、武藏丸(横)、大東丸(横)」

ヲ加フ

(内令提要卷三、四八ノ二九頁参照)

内令第九八三號

潜水艦戰團部署標準草案別冊ノ通定メ之ヲ試行ス

別冊ハ海軍文庫ヲシテ所要ノ向ニ之ヲ配付セシム

昭和十九年八月二十日

海軍大臣

内令
提
要
登
載

官房軍機密第一〇九八號

當分ノ間特種兵器ノ計畫及造修ニ關スル事務ハ海軍艦政本部處務規程ニ拘ラズ海軍艦政本部長ノ定ムル所ニ依リ海軍艦政本部第四部及第五部ニ之ヲ分掌セシムルコトヲ得

昭和十九年八月二十一日

海軍大臣

内令
提
要
登
載

官房人機密第一六四四號

滋賀軍軍航空隊西ノ宮分遣隊及同實隊分遣隊職員中特務士官以下ハ所管ニ不拘西ノ宮分遣隊ハ横須賀鎮守府在籍者實隊分遣隊ハ吳鎮守府在籍者ヲ以テ之ヲ補充スベシ

昭和十九年八月二十一日

海軍大臣

○通牒

秘海軍公報 第四七七八號 昭和十九年八月二十三日

官房機密第五一七號

昭和十九年八月二十三日

關係各廳長殿

軍機秘海軍公報(乙配付)配付先一覽表調製

ニ關スル件申進

軍機秘海軍公報ノ配付ニ關シテハ甲配付(各廳ニ配付)及乙配付(各司令部並ニ關係各廳ニノミ配付)ニ區分セラレ候處海軍大臣官房ニ於ケル配付ノ確實竝ニ迅速ヲ期スル爲自今軍機秘海軍公報(乙配付)ニ掲載スベキ原稿ニハ必ズ起案廳ニ於テ「關係配付先一覽表」(但シ各司令部ハ之ヲ記載スルニ及バズ)ヲ調製添付相成度

海功調機密第二〇號ノ四

昭和十九年八月二十二日

海軍功績調査部長

内令
提
要
登
載

關係各廳長殿

功績名簿取扱特例ニ關スル件通牒

大東亞戰爭功績調査細則第六條第三號ノ規定ニ依リ功績明細書ニ代ヘ功績名簿ニ依リ功績其中ヲ爲ス者ニシテ警備任務等ノ特別任務ニ服シタル場合ハ功績名簿勤務期間ノ欄ニ警備任務等ノ特別任務ニ服シタル期間ヲ併記シ功績等級欄ニ特別任務ノ功績ヲモ加味セル綜合等級ヲ記入シ備考欄ニ特別任務ノ概要ヲ記載

シ特別任務ニ服セザル者ノ名簿ト區別シ別個ニ進達移牒スルコトニ定メラレ候
尙功績拔群者ニ對シテハ本名簿ニ各人毎ノ見證書ヲ添附スル義ト了知相成度

○雜款

○移轉

第三〇五設營隊ハ八月一日横須賀海軍施設部ヨリ木更津航空基地ニ移轉事務ヲ開始セリ

○事務開始

臺北地方海軍人事部(假稱)設立準備事務所ヲ八月一日高雄海軍人事部内ニ設置シ事務ヲ開始セリ

○事務所撤去

軍艦天城艦裝員事務所ハ八月十日之ヲ撤去セリ

第三十八號海防艦裝員事務所ハ八月十日之ヲ撤去セリ

第七號輸送艦裝員事務所ハ八月十五日之ヲ撤去セリ

○殘務整理

鹿屋海軍航空隊ハ七月十日附解隊殘務整理ハ愛知縣豊橋市大崎町豊橋海軍航空隊ニ於テ之ヲ行フ

第百八防空隊ハ八月五日解隊第二十一特別根據地隊ニ編入殘務

整理ハ第二十一特別根據地隊内ニ於テ之ヲ行フ

○赴任轉勤旅費ニ關スル件

八月十五日以降當班ヘノ赴任轉勤者ニ對スル旅費(家族移轉料ヲ除ク)ハ總テ北海道網走郡美幌町迄前金拂ノ事ニ取計ハレ度
(第三十六魚雷調整班)

○變更

八月六日附秘海軍公報合同海軍葬儀執行時刻舞鶴海軍人事部ノ部一〇〇〇ヲ〇九三〇ニ變更シ金澤地方海軍人事部ノ部一〇〇〇ニ訂正ス